おっさんのリメイク冒険日記2

～オートキャンプから始まる異世界満喫ライフ～

「試し読み版」

緋色優希
イラスト 市丸きすけ

ツギクルブックス

1章　おっさん、ルーバ爺さんからの依頼を受ける

「ふわあ～」

俺は、んーっと大きく伸びをした。

今日で異世界へやってきて71日目。

あのアドロス中を巻き込んだ騒動から、早くも1週間が経った。エリの屋台の方も順風満帆のようだ。その他にも商業ギルドとともに、いろいろな新しい食い物を出せないかと相談中だ。

そのあたり、もはや俺よりもエリの方が専門家かもしれない。なかなかの天才ぶりだ。今までいろいろと苦労してきたのと、元から頭がいいせいだろう。読み書き計算も抜群で、とても10歳には思えないほどだ。商業ギルドでも評判がよく、このままだと将来は商業ギルドで働くことになるかもしれない。それも悪くない道だ。選択肢は多いに越したことはない。

もうエリ一家の護衛も解除しており、そんなに問題はない。あの親子に手を出すヤツらがいたら、広場の、いや街の連中が黙ってはいまい。

エリたちは、貴族とつるんで今まで散々街の人を苦しめてきた、あのクソどもを放逐する役割を果たしてくれたのだ。そして、新しい仕事の創出を担うフロンティアでもある。この街の

人々にとっては希望の光なのだ。
そんなおり、ルーバ爺さんから呼び出しがあった。先日の一件ではえらく世話をかけたから、挨拶に行こうと思っていたところなので都合がいい。俺に何か頼みごとかな？　できる限りのお返しはするぞ。
早速、さらっと転移魔法で王宮ゾーンへと向かう。ここの王宮は王都の中心にあるので、アドロスにいる俺にはかなり遠い。本来ならば、王宮前まで転移魔法で行くには許可が必要となる。一応、貴族街のある第2壁面の門番と、王宮ゾーンの第3壁面の門番には断りを入れた。途中はみんな転移魔法だけどね。
西門から中へ入り、王宮南側に面する入り口ホールまで目視で転移した。前回来た時は、王宮北側にある騎士団官舎経由で王宮の中へと案内された。あれが王宮ゾーンの王族専用通路となっているようだ。
広めなホールは、大企業の受付と待合スペースのような感じだ。受付すれば勝手に入れる人や、迎えに来てもらわないと入れない人とかいろいろいるらしい。広い吹き抜けのような空間なので、息が詰まるようなことはない。この屋根の上には、国王が閲兵をしたりする場所があるようだ。
門番の兵士に用件を伝えて、そのまま待つ。冒険者カードを見せたら、すぐに対応してくれ

た。なにせ一応は伯爵待遇の身分なのだ。丁重に対応してくれる。
しばらくすると、以前にダンジョンでエミリオ殿下の護衛をしていた、美しい女性が迎えに来てくれた。まぶしいくらいのロングの金髪に、美しい青い瞳。鼻筋がしっかり通っており、公爵令嬢といっても通りそうだ。体つきはいかにもご令嬢といった感じなのだが、あのダンジョンから帰還する行軍にもよく耐えていた。殿下の護衛として、それなりには鍛えているのだろう。ただのお人形さんよりは、よっぽど好感が持てる。
「お久しぶりです」
「お久しぶり、英雄さん」
つい笑ってしまった。この俺が英雄さんねえ。
「いやいや、どっちかっていうと〝貴族殺し〟と呼ばれているそうですが。ここにも、私の顔を見て真っ青になって逃げ出すヤツがたくさんいそうだ」
「うふふ。そうかもしれないですわね」
美人さんの楽しげな笑いが取れたので大満足。美人のご令嬢相手には、馬鹿丁寧な話しぶり。当然だよね。
楽しく談笑しながら話をして分かったことは、この美人さんは子爵家のご令嬢で、エリスさんというらしい。前回は名前も聞かなかったな。防御魔法に優れた人だった。〝王国の盾〟と

呼ばれている一族だそうで、Aランク試験では兄2人が国王陛下の護衛をしていたようだ。彼女は縁があってエミリオ殿下の護衛をしている。筋金入りの一族ってわけだ。
ははあ、それで最後まで殿下のお側にいたというわけか。最後の砦として残されたのだな。そういやキメラのブレスを、相当長い間、見事に防いでいた。

王宮の後部にある、いわゆる後宮とでも呼ばれるゾーンへと入り、殿下のお部屋に案内された。エリスさんも、いつもそこで殿下と一緒にいるらしい。それにしても結構歩くな。この王宮は、地球の一般的な王宮よりも縦横3倍くらいありそうだ。王都の壁もさることながら、よくこんなものを作りやがったな。初代国王というのは、とんでもないヤツだ。
「爺さん」なんていつも呼んでいたけど、ルーバさんは〝第3王子侍従長〟の肩書きを持つ立派な騎士だった。昔は騎士団長を務めており、身分は子爵だそうだ。まあ気の張らない人なので、今さら態度を変えるつもりはないが。
「やあ、爺さん。こないだは世話をかけたね。エミリオ殿下もお変わりなく」
「アル！　また冒険だったの？」
うん、殿下は相変わらず可愛いな。
「まあ、街中のお話でしたけどね」

「おお、よく来てくれたな。実は折り入って、お主に相談がある」
「何だい。喜んで聞かせてもらうよ」
「うむ。実は、このエミリオ殿下にまつわることじゃ」
爺さんの話を要約すると、第3王子の立場はあまり芳しくない。望まない国に出されそうになっている。どちらかといえば敵国への人質に近い。
上の兄に阿る貴族たちの思惑で、そういう動きになっているらしい。兄たちは弟を可愛がっているので不憫に思っている。親子ほど歳の差があるみたいだし。外交絡みで国王も強くは反対できない。考え方一つで、何がいい悪いは簡単には決められないようだ。
第3王子となれば、いずれは外に出す身。国の益になる形にしなければならない。そのへんは、さまざまな思惑と駆け引きがある。公爵家の創設もむやみにはできない。国に残すのは難しい状況のようだ。
王は心を痛め、事態の打開を図るために功績を挙げさせるべく、ダンジョンにあると言われる指輪の捜索の任務を与えた。だがパーティは、ほぼ全滅。かえって第3王子排除派の貴族どもを調子づかせる結果になってしまった。
「かくなる上は、お主に頼みたい。国王陛下の許可もいただいている。本来なら王子本人が行かねばならないのだが、王子はまだ幼いので、それは構わぬ。代理人として、王子を救った英

雄、しかもSランクのドラゴンスレイヤーであるなら、ヤツらも文句をつけられない。身分も伯爵相当なので、全く問題はない。ぜひとも頼む」
そして、爺さんはニヤリと笑うと、俺を意味ありげに眺めながら言った。
「それとのぉ。お主のような暴れん坊に、正面からケチをつける度胸のあるヤツらなど、あの小心者どもの中にはおらんよ。貴族殺し様よ」
どちらかといえば厳しい顔つきのルーバ爺さんが口元を緩め、さもおかしいと言わんばかりだ。
「はっはっはっ。了解したぜ。引き受けよう。なかなか面白そうだ。それに他ならぬルーバ爺さんの頼みで、エミリオ殿下のためとあってはな。何をおいてもやってやるさ」
「そうか。やってくれるか。そう言ってくれると思っておった」
爺さんは満足げに笑い、リラックスして品のよいソファに座った。よほどエミリオ殿下のことが大切なのだろう。俺は思わず頬が緩んでくるのを止められなかった。
「ところで、その指輪というのは？」
「うむ。伝説の指輪じゃよ。いくつもの物語にもなった。かつて１０００年の昔、稀人（まれびと）の初代国王がこの国を作った時、手にしていたという伝説の魔道具でな。多くの軍勢に神がかった力を与えたそうだ。その後、悪用を恐れた初代国王自らの手で封印されたという。最近の隣国の

動きといい、情勢も不安でな。殿下が半ば敵国へ出されんとするのも、そういう動きがあっての話でもある。指輪を手にしたとあれば、その功績は莫大なもの。おかしな動きも封じることができよう」

爺さんは、神話の世界のような話を語った。初代国王か、まさに伝説の英雄だな。

「なるほど。建国神話に登場した神器というわけか！」

それ、絶対に稀人国王が作った物だろう。もしかして俺に近い能力を持っていたのか？

面白いな。指輪の完成度を見てやるとするか。職人魂が疼くぜ。

「他に誰か連れていってもいいのか？」

「ふむ。連れていきたいものがおるのか？」

爺さんも、あまりいい顔はしていない。極秘にしたいのだろう。

「アントニオって男だ。もう1人のドラゴンスレイヤーさ。何かあった時のために、もう1人いても悪くない。俺は見かけより慎重な男なんだ」

「よかろう。その男、褒美は何がよいのじゃ」

口止め料込みかな？

「俺には聞かないんだな」

ちょっとばかり拗ねてみせる。

「お主は今さらじゃろうて」
「ははは、そうかい。そいつはな……あのオルストン元伯爵家の三男だ」
「なんと……あのオルストン家か」
爺さんの顔に陰が宿る。酷い話なのは聞いていたが、名前を出すだけでそんな顔するような事件だったのか。そういや、騎士団もかかわっていたんだったな。かつて騎士団長を務めたという爺さんにとっても、いい思い出ではないのだろう。
「伯爵家再興の夢が破れ、隠遁している兄貴のために、オルストンの名で伯爵家を創設したがっている。というか、それは俺が焚きつけたんだけどね」
「ほっほ。お主らしくていいわい」
爺さんは皺くちゃな顔を、さらに歪めて笑った。
「そいつは実力があるし、ドラゴンスレイヤーの称号もある。元伯爵家の人間だしな。すぐにAランクにもなる。Sランクに上がるのに、実績でもう一押しさせたいと思っていたところでね。あいつの次男の兄貴にも随分と世話になっているしな。ここはガツンといきたいとこさ。どうだい？」
「よかろう。お主のお墨付きならばいうことはない。Sランク推薦の件は、わしから王にお願いしておこう。では頼んだぞ。どうせ必要なものなど、自前で用意できるのだろう？」

ルーバ爺さんは顎髭を撫でながら、さも当然といった感じで言った。
「ああ、ただし指輪に関する資料が欲しい。探し方に何か特徴があるなら教えておいてくれ」
「分かった。あくまで伝説ということで、王家に残っている資料で説明しよう」
軽く指輪のレクチャーを受けて、その日は王宮に泊まった。エミリオ殿下に請われるまま、お休みになられるまで冒険の話に花を咲かせるのであった。

異世界72日目の朝がきた。
「アントニオ！」
俺は、冒険者ギルドの雑踏の中でヤツの後姿に声をかけた。
「何だい？」
そこには、こちらへ振り向いて返事をする偉丈夫がいた。まあ、かなり男前なんだがな。日本で見かけたなら、外国の映画俳優と言われても驚かない。
「お前、今は暇か？」
「ああ、まあ暇っていえば暇だな。それが何だ？」
飄々とした感じで応える。そうこなくちゃな。こいつも結構稼げてはいるはずだから、そうガツガツしていないはずだ。

「ちょっとアドロスのダンジョンまで行かないか？」
「それはいいけど、まだドラゴンも復活していないし。何しに行くんだ？」
欲しい獲物がいないと行かないわけだ。こいつも本当にあれだな。もうAランク以下の魔物には用がないと？
「お前も大概だな。まあいいや。ちょっと頼まれ仕事でな。あんまり変なヤツは連れていけないんだわ」
「へえ？」
「ここじゃなんだ。ちょっと付き合え」
間髪を入れずに、スパッとガラスの園へ転移した。アントニオが目を白黒させていた。
「おい、嫌も応もないな」
「まあ、あんまり人に聞かれたくない話なんだ」
そして、指輪の件を話して聞かせた。
「なるほどな。そいつは面白そうな仕事だ。で、見つけたらSランクに推してくれるって？」
「あくまでAランクになってからの話だがな。まあお前なら問題ないだろうし。ドラゴンスレイヤーだからそれだけでもSは通ると思うが、駄目押ししておけば堅い。何があるか分からんしな。第3王子サイドからの推薦だ。もともとこれは国王が第3王子に下した勅命だから、そ

う悪い話じゃないぜ」
「ふむ。やってもいいぞ」
興味深げに了承するアントニオ。さすがは話が早い男だぜ。
「助かる。一応保険をかけておきたいんでな。万一、俺が戦闘不能になっても、お前ならドラゴンでもなんとかなる。それに、お前となら自重なしでやってもＯＫだしな」
「嫌な信頼のされ方だな」
「ギルマスも、俺１人で行かせるのは不安だろうから、お目付け役がいると安心するだろう」
また小言を聞かされるのも嫌だ。
「ちゃんと自覚があるんだな。安心したよ」
「まあ、いろいろやらかしているしな。よし、決まりだ」

冒険者ギルドに戻ると、２階のギルマスの部屋を訪ねて、一応断っておくことにした。
「また、そんな話か。まあ、王家からの依頼だしな。行くなとは言えんが……不安だ」
「そのためのアントニオじゃないか」
脇にいるアントニオを親指で指して言った。
「最初からそんな手配をしておくなんて、狡(こす)っからくなったな」

「進歩したと言ってくれ」
爺さんからもらった資料を検討し、一応ギルマスの意見も聞いておく。
「支度はできている。いつ出発でもいいぜ。アントニオ、これを渡しておこう。無限収納の腕輪だ。今回用の強力な武器や、水や食料にテント、それに各種ポーションだ。魔力切れ対応の時用に魔力を充填した魔石なんかが入っている」
「いい物を持っているな。俺にも一つよこせ」
ギルマスから注文が入った。毎度あり？
「はいよ。これでいいか？　一応中身は空だけど」
「構わん。こいつは便利そうだ」
２人が腕輪を使えるか試してもらって、問題なさそうなので出かけることにした。さすが、このクラスの人材は、いきなりでも新装備を平然と使いこなす。
俺たちはギルマスの執務室から姿を消した。

すぐにアドロスダンジョンに転移して、今40階。
資料によると、指輪は最深部辺りに隠されているが、最深部の50階とは限らない。指輪は独特の波動を出しており、魔力感知に優れた者ならば波動をキャッチできるようだ。

ある冒険者パーティは指輪を感知していたものの、何故か指輪は移動しており、見つけられなかった。最終的には、魔物の気配と間違えたのだろうということになった。ただし、感知したのはBランクのシーフであり、明らかに魔物の気配とは異なるとのレポートを残している。

リーダーは高名なAランク冒険者であり、魔物説には非常に懐疑的だった。理由はあまりにも階層間を行き来しすぎで、上は40階でも確認したという。はぐれでも、魔物にはそこまで常時動くものはいない。

「というわけで、俺たちは今40階にいる。まずはここを起点に最深部へ向かって行こうというわけだ」

「どうやって探す？　お前のことだから何か考えているんだろう？」

「俺のスキルで捜索する物体の位置を特定できる。指輪は資料で見ただけでイメージが曖昧だから、何とも言えないけど。まあ、他の人間に比べたら分はいいだろう。あと……」

少し躊躇いがちに話を切り出す。

「あと？」

ちょっと不安になったらしいアントニオが、怪訝そうに聞き返す。

「まあ、最初にハッキリ言っておこう。この指輪は、ヤバいから封印したんだよな」

「まあそうなるな」

軽く頷きながら答える。軍勢に影響を与えちまうようなアーティファクトだからな。
「つまり、何らかの防御のギミックがあると考えるのが普通じゃないか？」
「そうだろうな。封印場所にはトラップとかあるんじゃないか？」
当たり前なことを言うなという顔で、アントニオが首を竦める。
「だが、指輪はその防御システムとともに移動しているのかもしれない。大人しく安置されているなんて、誰も言っていない」
「まさか！」
やや驚きの顔で見つめ返してくる。そういう話は、今まで聞いたことがないのだろう。
「そのまさかの可能性もある。もし１０００年間、指輪を守って動き続けてきたのなら、手ごわいはずだ」
「魔物か？」
慎重そうに聞いてくる態度には好感が持てる。蛮勇な相棒など欲しくない。
「俺は初代国王が作ったものじゃないかと考えている。前に宝物庫の見学をした時に、初代国王が作ったと思われる魔道具をいろいろと見た。半端なものじゃなかったぜ」
「何だと思う？」
手を顎に置く仕草で、アントニオも首を傾けた。そんなポーズも様になっていやがるぜ。

「もし本当に初代国王が作ったものが指輪のガーディアンなんだとしたら、たぶん強力なゴーレムではないかと思う」
ゴーレムというか、きっとアレだ。
「何故そう思う」
「初代国王は稀人。稀人の国には、さまざまなゴーレム（ロボット）の物語がある」
「何故そんなことを知っている？」
何を言っているんだ？　こいつ。
「俺が稀人だからに決まっているだろ？」
「……何ー！」
あ、驚かれた。
「あれ？　言ってなかったっけ？」
「聞いていないぞ」
ヤツは端正な顔を顰めて言い返す。
「そういやアーモンにしか言ってなかったっけ。まあいいや」
「よくはないが。まあ……今さら言ってもしょうがない。で、そのゴーレムとやらは手ごわそうか？」

動じないヤツだな……話が早くて助かるが。こいつには俺が稀人だと言っても問題ない。それに最初はビビっていたが、この期に及んで稀人だからという理由で俺に手を出すヤツがいるなら、いつでもお相手しよう。

「たぶんだが、初代国王はあまり自重しないタイプの人間だったと思うんだ」

「……」

アントニオが、お前が言うなとばかりにジト目で俺を見た。

「そんな顔で見るなよ。とにかく、やばそうだったらすぐ撤退だな。相手が逃がしてくれるかどうかは分からんが」

「分かった。しかし、お前がそんなに弱気になるとは」

ヤツも少し渋い顔だ。相当ロクでもない話だと理解できたようだ。だから、お前を呼んだんだよ。

「いや。相手が稀代の稀人が残したシステムとなると、どんなものなのか。俺の場合、なまじ想像がつくから怖い。慎重にいくぞ」

アニメに出てくるようなヤツが出てくると困るな。目からビームとか願い下げなんだが。洒落にならないＢＣ（生物・化学）兵器とかは絶対やめてね。いくらなんでも、Ｎ（核）兵器はないよな？

ＭＡＰを起動し、伝説の指輪を検索する。この階にはいないようだ。代わりに魔物が現れた。お馴染みのキメラだ。迷宮の大地から弾けるように襲ってくる。そしてヤツがブレスを吐く体勢に移った。

すかさず魔道鎧を発動。一瞬にして間合いを詰めて、オリハルコン刀の魔法剣で首を落とす。最初はこいつにも手間取ったもんだけど、今は完全に雑魚扱いだ。

そこからは面倒なんで、攻撃ポッドを多数展開する。雑魚を掃討しながら探索を続けた。

指輪の番人はこの階にはいないな。おそらくは最深部にいるのだろう。だが、レポートを見る限りでは上から攻めた方がいいはずだ。俺たちは上から順に攻めていき、たまに出る大物を狩っていった。

その後、キメラ以外のＡランクは出てこなかった。ドラゴン同様、まだ各階のボスは復活していないようだ。キメラは何か特別なのかな。異様にしぶとかったし。

俺たちは次々と現れる雑魚魔物をアイテムボックスに収めながら移動していき、門番に出会うことなく最下層に辿り着いた。ＭＡＰの輝度がいきなり上がった。おっと、この反応は！

強者だな。ドラゴンでさえ、こんな反応はない。説明を見なくても分かる。だが、何故か危険な感じはしない。それでも、こいつは圧倒的に強い。

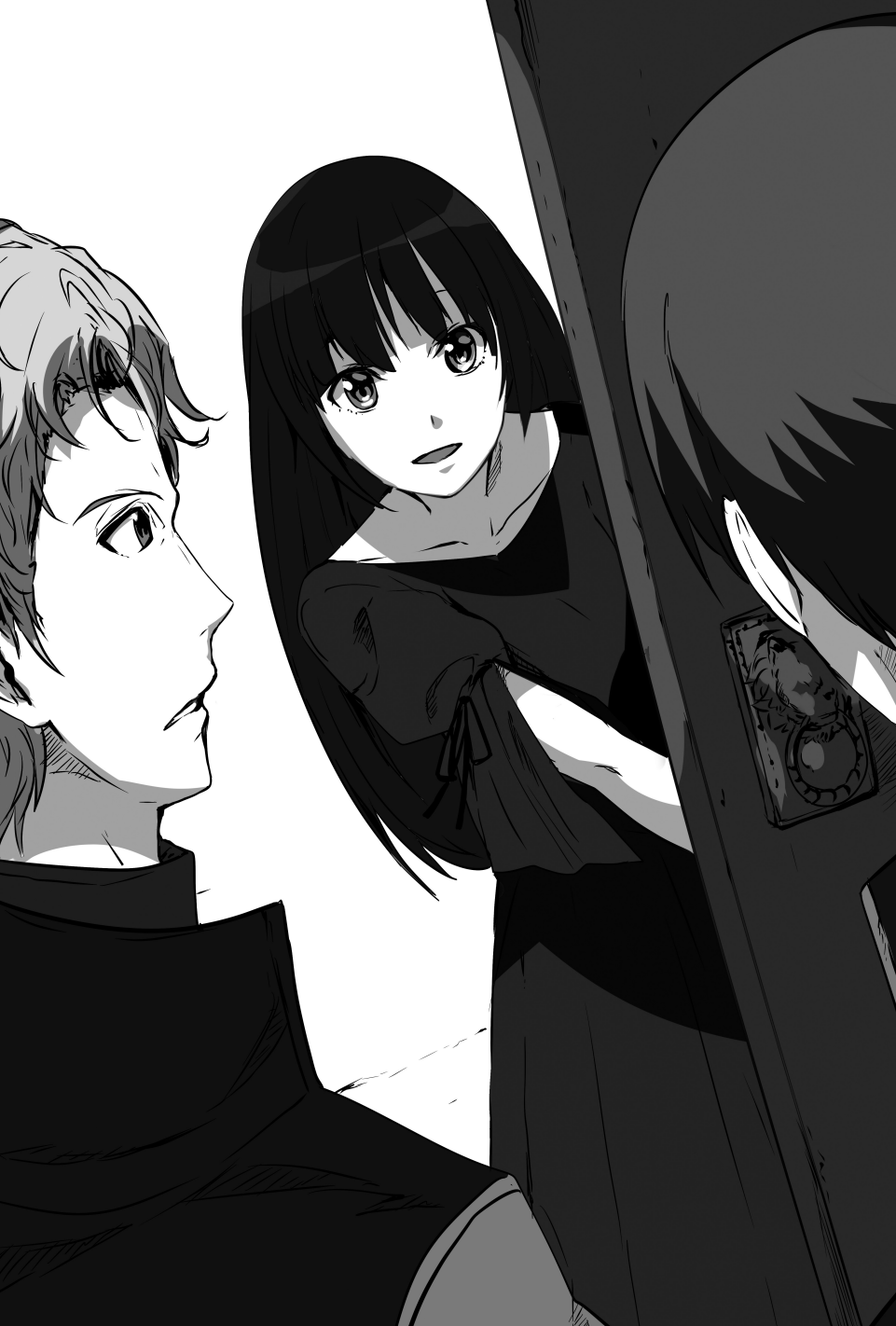
「いたぜ。なんかヤバい気配がする。お前、魔道鎧はどれくらいキープできる？　ドラゴンと

やりあったレベルの魔力放出で。少しでもヤバいと思ったら、迷わず魔石を使え」
「今なら、あのレベルで1時間はもつが」
それなら、いけるか？
「あいつは、もともと50階にいやがるんだろう。探索者が来たら戦わずに移動する。ただし、出会って指輪を奪いに来たらどうなるか。ヤバかったら一時撤退だな」
「了解した」
いざ討ち入りとなっても、落ち着いた物腰だ。さすがは武門の誉れと言われた一族だな。頼もしいぜ。
「正直舐めていた。連れているのがお前じゃなかったら、ここで一度撤退だよ」
「そうか。さあ、拝んでやろうじゃないか。初代国王の遺産とやらを」
俺たちは、指輪の門番に挑むことになった。

俺はレーダーＭＡＰで、指輪の気配を慎重に探した。検知されたことをヤツが確認したら、動くかもしれない。いつものようにズバッといくのではなく、そーっと探るように最低の魔力しか使用しないモードで探索を行った。
だが、何か様子がおかしい。指輪の位置というか、安置場所というか。祭壇のような空間を

想定していたが、そうではないようだ。俺が見つけたものは……部屋？　あるいは家？　そして、そこにいる者は穏やかな気配だ。いや、優しいといった方が正しいのか。
え？　これが番人？　俺が変な顔をしているから、アントニオが不思議がっている。
「どうした？」
「あ、いやあ、なんかね……」
「歯切れが悪いな。一体何だ？」
「いや、だってさ」
そして、俺はダンジョンの壁の前に立った。普通は気が付かないだろう。ここか！
手を前に突き出したら、そこの壁を通過した。アントニオも驚いて、眼を見開いた。
「これは……」
指輪の番人は、なんと〝家〟の中にいた。前にドラゴンを退治した時には全く気が付かなかった。高度な隠蔽が施されているらしい。指輪を検索したりしていなきゃ、俺も一生気が付かなかったかもしれない。
うーん。家の中にいるとは。これは考えていたのと違うな。話が通じる相手かもしれない。レーダーで見つけ出した頑丈そうな扉には、なんと格好のいいライオンのノッカーが付いていた。どこかで見たようなデザインだ。というよりも、普通に地球の家とかで玄関に付いている

タイプだ。これは、もしかして！　迷ったが、ノックしてみた。
「どうぞ～」
へ、返事があった。
高音質のインターホンのように、涼やかな声が聞こえるとともに解錠音などがし、ハイテクそうなロックの外れる音がした。
俺たちは顔を見合わせた。少し逡巡した後に、思い切って入ってみることにした。ドアを開けて、中へと足を踏み入れた。
「お邪魔しま～す」
家の中に入ると、素晴らしい美人がにっこりと笑っていた。美少女といった方が正しいか。年の頃は16歳くらいだろうか。黒髪黒目で、日本人の顔立ちの美少女だ。いや、少しハーフっぽいかな。だが、こちらの人間と比べれば日本人だと一目で分かる。出るところもしっかり出ていて、なかなかに魅力的な容姿といえるだろう。
「お客様なんて何年ぶりかしら。嬉しいわ。ここが、よく分かったわね。モニターで見ていたけれど、貴方が私に敵意を抱いていないことはすぐ分かったわ。それに……」
彼女は少し言い淀んだ。何かを期待するかのように。そして、それは懐かしい言葉、日本語だった。ああ、久しぶりに耳にする日本語の肉声は、俺の心に深く染み込んだ。



憧憬・哀愁・郷愁・思慕。何といったらいいだろう。初めて会う俺に対して、彼女はそういったものを綯い交ぜたような視線を投げかけた。

うん。黒髪黒目で平たい顔族だものね。いや、俺の目は茶色で結構彫りの深い顔立ちなんだけど、まあ日本人の範疇だ。目は茶色だけど、海外ならちゃんと日本人と認めてもらえるレベルだ。彼女は明らかに、日本人に対して単なる好意以上の感情を抱いているようだった。

「やあ、こんにちは。その、違っていたらすまないんだが、君はアルバトロスの初代国王に作られたゴーレム……いやアンドロイドか何かなのか？　彼は日本人だったのかい？」

俺も日本語で尋ねてみた。

「まあ、貴方は……やはり日本人？」

俺は自分の名前を告げた。

「私を作ってくれたご主人様は船橋武というのよ」

そのまま、日本人の名前だった。分かってはいたのだがな。

「ごめんなさい。もう日本式の飲み物も食べ物も、何も残っていないの」

「えっと、いるんなら分けようか？　いくらでもあるから」

俺は、ペットボトルの飲み物とスナック菓子を取り出して、両手に持って見せた。

「いえ、私は本来、食事を必要としないので」

「ここで、ずっと指輪の番を？」
俺は、部屋の中をぐるりと見回しながら聞いた。
コンクリートに壁紙を貼ったような壁、日本でよく見かけるような机や椅子、全体的に質素な部屋だ。でも、よく整理されていて埃一つ落ちてはいない。
「はい。他にやることもないので。それがご主人様の最後の命令でした」
「そうか。俺や船橋のいた国ではそういう物語はたくさんあるが、実際にそうしているヤツを見ると、何て言ってやったらいいのか分からないよ」
思わず目を瞑って、その永過ぎる時を思いやった。
「そうなのですか？」
「なあ。お前、俺と一緒に……冒険の旅に出ないか？」
「え？」
「俺の住んでいた所では、お前のような忠義者を尊ぶ習慣がある。どうせ冒険に行くのなら、お前のようなヤツとともにと思ったんだ」
いつか、心から信頼できる仲間を作ろうと思っていた。俺もこの世界では異端なものだ。この子となら。
「そうですか。ご主人様の住んでいた所も？」

「どこだ？」
「よく分からないのですが」
出身地の手がかりになるようなものはないのか。まあ、日本の地名の説明なんかしなかったのかもな。
「じゃあ薩摩ということにしておこう」
日本でも有数の戦闘民族だからな。
「おい！」
アントニオに脇腹を突かれた。
「あ、肝心の用件を思い出したぜ。船橋武の子孫が、ちょっと大変なんだ」
「え。どういうことですか？」
簡単にエミリオ殿下や国の事情を説明する。
「分かりました。そういうことなら指輪をお持ちいたします」
「いいのかい？」
「もう一つ、ご主人様から頼まれていることがあります。いつか、いつの日か、私の子孫が窮地に立つことがあったら助けてやってくれと。その指輪が本当に必要なら渡してやってほしいと」

そっと目を瞑り、在りし日の主人を思い出すかのように。
「そうか。やることがなくなっちまうな」
「貴方が冒険の旅に連れていってくださるんでしょう？」
「ああ、そうだった！」
よし、冒険の仲間ゲット！　この世界における冒険の酒場は迷宮の底にあったのか。
「ここを出て魔力は大丈夫か？　お前はここの魔力で動いているんだろう？」
「お気付きでしたか」
「ああ、持っている知識は同じようなもんだからな。発想も似たり寄ったりだ」
うん。彼の愛読書や、見ていた番組や映画が目に浮かぶようだな。
「俺の魔力は使えるか？　魔力を貯めた魔石があるからそれも使える。俺が死んだら、またここにくれば困らない。それと……武のお墓参りに行こう」
「そう……ですね」
指輪の門番が、はにかんで微笑んだ。
転移で王宮前に戻り、城の衛兵に言伝（ことづて）を頼む。
「ルーバ侍従長を呼んでくれ。捜索を頼まれていた指輪をお持ちしましたと。あと、大事な賓

客を1名連れている」
兵士は一礼するや駆け出して、ほどなく爺さん自らがすっ飛んできた。
「まことか、アルフォンス！」
「ああ、見せてやってくれ」
そして、彼女は服の前をはだけ……形のいい胸の部分を観音開きに開く。そこには台座に固定された、件（くだん）の指輪があった。ミスリルのリングに、龍のようなデザインのオリハルコンの円環には解析不能な赤い大きめの魔石が嵌（はま）っていた。鑑定すると、【覇軍の指輪】とある。彼女はそれを取り外すと、ルーバ爺さんに差し出した。
「お納めください」
「お、お前は一体」
驚愕に顔を歪ませる爺さん。
「彼女は初代国王の船橋武が、この国の未来と指輪を託した者だ。頭（ず）が高いぜ、爺さん」
俺は悪戯っぽく笑って言った。
「船橋の姓を知る者か！」
絶句する爺さん。しばし、言葉もなく立ちすくんでいたが、やがて重々しく口を開いた。
「長い間、本当に長い間、お疲れ様でござった。この指輪、謹んでお預かりいたします」

爺さんは、恭しく指輪を手に取ると、深く深く頭を下げた。
「そういや、君の名を聞いていなかったな」
「真理よ。ご主人様の妹の名前です。私のモデルは彼女なの」
うーむ、初代国王はシスコンだったのか？
「10歳年下で、当時は17歳だったそうです。両親は早くに他界して、ご主人様が頑張って面倒を見ておられたのですが」
「うわあ……」
その状況でこっちの世界へ来ちまったのか。南無三。俺は独り身で何にも困らなかったが、それはそれでくるものがある。ちょっとだけ悲しい。
「彼ら兄妹はいつの生まれだ？」
「妹さんは１９９８年生まれ。ご主人様がこの世界へやってきたのは、日本で２０１５年のことでした」
うお！　ほとんど同じ年代だな。妹さんは、今も兄が帰るのを待っているかもしれない。
指輪は王家へと渡された。王宮の中へ通されて、真理とエミリオ殿下が顔を合わせた。
最初にエミリオ殿下を見た時、真理は思わず大粒の涙を流した。ちゃんと涙も流すのか。

「ご主人様の子供の頃にそっくりだわ。スマホの中にあった写真の……。髪や目の色は違っても、面影がくっきり分かるわ。この子に危害を与える何者も、私は決して許しません」
そう言って真理は、大事に保管しておいた船橋武のスマホを握り締めた。俺が充電してやったのだ。状態保存の魔法がかかっていて、まだ十分に機能した。
「うわあ、初代国王様に作られた人なの？　お話を聞かせて～」
エミリオ殿下の無邪気な様子に、真理も思わず顔を綻ばせた。
「ええ、ええ、いいですとも。それじゃあ、初代王妃ミレーユ様に聞いた初代国王や、この王宮などのお話を……」
その後、国王陛下にも謁見した。国王陛下も涙を流し、大儀であったと。
「１０００年か……」
その時を見定めるように、優しげな表情を真理に向けた。
「これから、どうするのかの？」
「彼が誘ってくれました。俺と冒険の旅をしようと」
「そうか。アルフォンスよ、その者をよろしく頼む」
「分かりました。自分から誘ったのですから」
国王陛下も満足そうな表情で俺たちを見送ってくれた。

2章　おっさん、若者と冒険する

ここは、ダンジョン近くの茶屋。問答無用で、さっきの小僧を連れ込んだ。

「名前は？」

「は、はい。ベルグリット、ベルグリット・フォン・シュタイナーといいます。一応、男爵家の生まれですから貴族名になっていますが、僕はしがない六男です。母親も平民出身の側室ですから、貴族でないも同然です」

なるほど。いかにも六男といった感じで、迫力も貫禄も全くない。なんというか、眼鏡男子？　主夫でもやらせたら似合いそうな、乙男（オトメン）とでもいった感じの優男だ。ちなみに、この世界には普通に眼鏡が流通している。値段はかなり高いらしい。

「お前は何者だ。それに、さっきの話はどういうことだ。ダンジョンで今何が起きている？」

「僕は王宮勤めの文官、といっても下っ端なのですが、ダンジョンを管理する部署、ダンジョン管理局に所属しています。僕の研究によると、スタンピードが起きる兆候が見られます。ただ、確証がなくて」

いろいろ話を聞いてみたが、こいつの母親は側室なので、万が一にも跡目を継ぐチャンスは

ない。実家ではほぼ空気だそうだ。
母親は賢い人で、幼い頃からベルグリットをしっかりと教育し、本人も勉学に励んだ。その甲斐あってか、若くして（現在20歳らしい）立派に王宮勤めをしている。だらけて過ごしてきた兄たちからは、妬まれているらしい。仕事を紹介しろとか、いろいろ五月蝿いのだ。
もともと領地を持たない父親が、資産目当てで大商会の娘を側室に迎えたということなので、母親の実家は裕福だ。母方の爺さんがすごく可愛がってくれて、たくさん援助してくれたそうだ。その金で贅沢などせず、勉学に全てつぎ込んだ。そんなヤツは、爺さんから見ても自慢の孫らしい。
そして薄給にも負けずに、爺さんの援助を受けつつダンジョンの研究をしてきた。ヤツの仕事場がダンジョンの管理をする部署だからだ。そして、最近のダンジョンに起きている異変に気付き、調査の必要を感じていた。何か胸騒ぎがする、と。
専門部署で実際の管理業務を5年間やってきた人間が感じとっているのだ。それがおそらく杞憂でないことは、第六感に助けられることが多い自分には分かる。
保身に拘るダメな上司どもは取り合うこともせず、「余計なことをしてないで、この部署やわしらが潤うようにせよ」と。ちなみに、彼が所属する部署も前回の一件で粛清された者がいたらしい。

「どう思う？」
率直に真理に聞いてみた。
「そうね。確かに最近はおかしなことばかりある気もするわ。私は長いスパンで見ているから、そんなに気にしなかったけど。スタンピードの兆候といえなくもないわね」
なるほどな。調査の必要はありそうだ。こいつも仕事持ちでそんな暇はないだろうし。
ん？　こいつ、王宮勤めだよな。そうか……それなら。
「おい、お前。明日、ちょっと一緒に来い」

◆◇◆◇◆

それにしても、どうしてこんなことになったのだろう。一体何が起きているんだ？
今自分が見ているものが信じられない。
あ、ありのまま、今起こったことを話すよ。
ここは王宮だ。僕の勤め先ではある。
しかし……しかし！　ここは謁見の間じゃないかあ～。
王宮勤めとはいっても、僕がいるのは王宮の隣にある巨大な総合庁舎だ。王宮本体にいる、

王宮付きの文官ではない。国王陛下のお姿なんて、祭事などで遠目に拝むのが関の山だ。僕は男爵家の六男。自分自身が貴族になることは一生ない。叙爵されることなどないから、一生縁がない場所だと思っていたのに！

「やあ、ジョージ。ちょっと今日は緊急なんだ。悪いが通してくれ。国王陛下にお会いせねばならないが、人を呼んでもらっている時間が惜しい」

「そ、そうですか。分かりました。エミリオ殿下を救った英雄である貴方なら問題はないでしょう。上の方には報告しておきますので」

「悪いな。今度奢るぜ」

この人ってば、冒険者証を出して顔見知りの兵士に王宮の中へ入れてもらったんだけど、勝手にずんずんと歩いていって、いきなり謁見の間に来たかと思うと、警護の兵士さんにこう言い放ったんだ。

「Sランクの勇者が、今から国王陛下に会いたいんだが、取り次いでくれないか？　場合によっては、国家の危機となりうる内容なので、取り次がなかったら君が罪に問われる恐れがある」

兵士さんは、鯱張って敬礼した。

「ははっ。ただ今！」

彼はそう言うと、慌てて中に入っていった。もう1人の兵士さんも、畏怖の目でこの人を見

ているし。とんでもなくヤバい人にかかわってしまった。
「こちらへどうぞ。アルフォンス様、ならびに他一名の方」
僕は顔を強張らせながら、この人の後ろをギクシャクしながらついていく。生まれて初めて、赤いカーペットの上を歩いていった。転ばなかったのは奇跡としかいいようがない。操り人形のようにふらふらと、いや操り人形の方が足取りは確かだったに違いない。
そして今、僕たちは国王陛下の目の前にいる。なんていうか、もう卒倒しそうだ。僕はきっと悪い夢を見ているのに違いない。大丈夫だ。僕は他一名の方なんだから！
「アルフォンスよ。お前の口から、国家の危機などという物騒な言葉が出てくるとは聞き捨てならんな。きちんと説明せよ」
「はい。簡潔に言えば、ダンジョンでスタンピードの兆候が認められるのです」
アルフォンスさんが国王陛下とやり取りしている。口調からして、今までも会ったことがありそうな感じだ。ますます大げさなことになりそうな気がする。なんだか眩暈（めまい）がしてきた。
「な、何だと!?」
陛下は身を乗り出して叫んだ。
「今、王都が壊滅するようなことにでもなれば、隣国がその気に乗じて攻め込んでくるは必至。十分国家の危機といえましょう」

そして国王陛下は、まるで遠い過去を眺めるかのような目をされて語られた。
「過去……幾多の危機があった。だがダンジョンの封鎖は無理だった。隣国には数多のダンジョンがあるが、我が国には2つしかない。そこでしか産出しない資源もある。また指輪の存在もあった」
だが、他人事ではない。僕はダンジョン管理部署の人間で、この件は僕の専門なのだ。気が遠くなっている場合じゃないぞ。気を引き締めて、この驚天動地の事態に襟を正して臨むことにした。
「こちらの専門家から話を聞いて、うちの真理もその可能性はあると。あいつは実際、その目で何度も見てきた生き証人ですから。さらに、私もずっと違和感がありました。なにせ当事者中の当事者ですので」
「うむ。調査の必要があるな。それにしても、そんな一大事が、王宮の部外者からもたらされるとは、一体どうなっておるのか」
「あ、こいつはずっとそのことを上の人間に訴えてきたのですが、握り潰されていまして」
それを聞いた陛下は、顔を唐辛子のように真っ赤にしてお怒りだ。
「おい宰相、どこの馬鹿どもだ！」
「それは……先日の一件で処刑された連中でございましょう。そこにいる者はダンジョンの管

理部署におるもので、大変優秀です」
宰相から褒めてもらっちゃったよ。なんで、こんな偉い人が僕のことを知っているの～。それを聞いた国王陛下は、苦虫を噛み潰したような顔をしているけれども。
アルフォンスさんは、笑いを噛み殺しながら陛下に申し上げた。
「そんなわけで調査に行きたいのですが、そいつは王宮勤めなのでね。通常業務を離れる許可をください。あと成果が出たら昇進させてやってください。上は空いてますでしょう？　こういうヤツを然るべきポストにつけておいた方が陛下のためです」
アルフォンスさんってば、暗にあんたの職務怠慢だと陛下を責めているし。
陛下も苦笑いしたいところを、あえて素晴らしい笑顔で返す。
「うむ。それは約束しよう。では早速調査に行くがよい。費用は後で請求せよ。いや宰相、先に支度金を持たせよ。それと、そこの文官の部署に連絡して、仕事が円滑に回るように手配せよ」
さすがは、敏腕と噂される国王陛下だ。諸外国も、この王様を侮るヤツはいないらしい。だけど、足元はちょっとおろそかだったのかな。
「それでは今から調査に行ってきましょう。じゃあお前、職場に挨拶くらいはさせてやる。国王陛下よりの勅命だからな。今すぐ行くぞ」

そう言うなり、アルフォンスさんは僕をせっついた。
かくして、この僕、ベルグリット・フォン・シュタイナーの大冒険は、こうも唐突に幕を開けたのです……。

◆◇◆◇◆

挨拶に行った先のベルグリットの上司、ライオルさんはなかなかの人物だった。トップは不在であったものの、しっかり切り盛りしていて、いきなり優秀な部下を持っていかれても全く動じない。
ライオルさんはいかにもな感じの平民上がりだが、貴族かと思うような立ち居振る舞いだ。顔つきも精悍だし、目も腐っていない。どこぞの男爵家の六男とは格が違う。
超頭がよくて切れ者らしい。だから空気も読んで大人しくしていた。前回の粛清によって、一気に頭角を現したのだ。腐敗にもついていかなかった気質だし、清貧だが世渡りは上手いってタイプか。見習えよ、ベル君。
彼は文句を言うどころか、さもありなんという雰囲気だ。
「いやあ、助かります。こいつから報告を受けていたのですが、上が馬鹿ばっかりでしてね。

動けなくて困っていました。大掃除してくださったのは、貴方だそうですね。ありがとうございます」
　おっと、お礼を言われてしまった。ダンジョンにベルグリットを行かせたのも、この人らしい。
「国王陛下に話を通していただいて、ありがとうございます。まだまだ風通しが悪うございますので、我々が話をしても果たして上まで通ったか分かりません」
　こういう優秀な官僚がいるから、この国は回っているんだな。この人も出世させようと心に決めた。主に俺のために。
「こちらに資料を用意してあります。今までどんな兆候が出ているのか、スタンピードごとに見られるようにもなっています。また、兆候だけをまとめ、類別もしてあります。各々見聞された階層も付記されておりますので、分かりやすくなっていると思います。資料を作成したのはベルグリットなので、分からないことはそいつに聞いてください」
　おお！　やっぱりベル君も優秀だったのか！
「ではベルグリット、しっかりお務めするのですよ。こちらの仕事は気にしなくてもいいです。陛下が応援を2人手配してくださるそうですから」

3章　おっさん、郷愁に心をとらわれる

あのダンジョンの激闘から1週間が経ち、異世界生活も90日目となった。

今頃、日本は2月の後半だ。一段落ついて、無性に日本が恋しくなる。

「はあ～、本物のラーメン食いたい。カレーやカツ丼もいいよなあ」

日本の食い物はあるが、自分にはあまり料理の才能がない。というか、いつも外食やインスタントの食事が多かった。持ち込んだ食料も、そういう物が多いし。

普通にお店とかで日本の物が食いたいなー。あちこちいろいろ回ってさ。

よし、アドロスで食い物屋をやってもらおう。それには先立つものがいるけど、残金はいくらだったかな。

ミスリル剣の代金が白金貨１００枚。国に売りつけた分として、ミスリル（鍛冶屋の親父経由で）が白金貨１０００枚、上級ポーション1万個分（ギルド経由）が白金貨５００枚、合計白金貨１７００枚になった。それらは、王国が帝国との戦争に備えて欲しがっていたので提供した。

鍛冶屋の親父ゴブソンも、「ＳＳランク冒険者の侯爵様ときたなら、今さらちょっかいをか

けてくるヤツもいないだろう。王様と面識もある。安心して商売しな」と言ってくれた。
オリハルコンの借りがあるので、この手のものは親父を通すことにしている。
「無理を言うヤツがいたら、【爆炎のアルフォンス】がお邪魔させていただくことになると、丁重に伝えておいてくれ」と言い残して。
どうせ二つ名が付くのなら、〝血塗(ちまみ)れの〟がよかったな。せっかく血塗れの魔物首を振り回しておいたのに台なしだよ。スタンピードの一件で、すっかり〝爆炎の〟で通るようになってしまった。
その他、もらった褒美、魔物素材をギルドに売った代金、金板を換金した白金貨10枚分、ドラゴンを売った分の白金貨10枚。締めて白金貨１７２０枚也。
日本円にしたら、約１７２０億円相当か。結構あるな。じゃあ、日本食の〝味の商店街〟とか〝フードコート〟を作ろう！　ラーメン横丁もいいな。

早速エリを連れて、アドロスの商業ギルドへと向かった。
「これはこれは、侯爵様。ようこそいらっしゃいました」
「よせよな。ロゴス」
もさもさの髭を耳から顎にかけて生やし、がっちりとして恰幅のいい身体つき。

どちらかというと、薄汚れたような印象のある人物だ。だが、それを感じさせないのは、その輝くような気概を秘めたブラウンの瞳のせいだろう。濁った瞳の持ち主には一生理解のできぬ、天上の魂だ。

このロゴスという人物は、このアドロスでも人一倍気骨がある傑物である。悪徳貴族とつるんだ盗賊ギルドの連中とも、丁々発止とやりあっていた人で、街の人からの信頼も厚い。

この人がいなかったらアドロスの町は廃れ、もっと寂れた様相となっていただろう。俺をSSランクに強く推薦してくれた1人でもある。

「それで、ちょっとお願いがあるんだけど」

「はい、はい。街を救った英雄さんの頼みなら、できる範囲で聞きますよ」

にこやかな笑みを、その年季のいった目じりと口の端に寄せて、二つ返事で答えてくれる。

「ほら、前から言っていた食堂街、まあ屋台でもいいんだけど。あれをやりたいんだ」

俺はうっとりと、脳裏に名古屋の地下街を想い、恍惚の表情を浮かべた。名古屋の百貨店上階にある食堂街も瞼の裏にちらつく。

俺の涎のたれ具合を密かに観察しながら、ロゴスは楽しそうにしている。

「まあ、それは分かりますが、先立つものがないことにはなかなか」

「とりあえず、いくらあったらできそう？　大体でいいや」

「そうですねえ。とりあえず、白金貨50枚あれば十分に」
「分かった」
そう言って俺は白金貨50枚を差し出した。残り白金貨１６７０枚相当だ。
「おお！」
わざと驚いたように、大げさにする。彼は俺の懐事情は大体分かっているのだ。だが食堂街などというものを整備するのに、ここまで金をかける心情は理解できないのだろう。いつの日か、その舌に伝わるといいな。
「さすがですな。これなら、まずフードコート。おっしゃられたような大きな建物の中に各コーナーを作ります。次に屋台村。屋根付きアーケードとやらの下に屋台を並べて。あとは手で引く移動式の屋台を。そんなところですかな」
「王都で出張販売をやるために、馬で引く移動屋台もかな。あるいはキッチン馬車とか。これらは、王都から客を引っ張ってくる宣伝の役割を果たしてくれるだろう。その他、交通路の整備と、治安の回復も必須だ。せっかく王都のすぐ近くという素晴らしい立地条件なんだ。ぜひとも富裕層とか呼びたいね」
「来てくれますかな？　富裕層の方が」
思案するロゴス。ここは〝神に見捨てられた街〟の異名をとる、治安の悪さで有名な街だ。

「宣伝次第じゃないかな。少なくとも、王家の方々には食い物は馬鹿受けだったけど。なんだったらエミリオ殿下に頼んで、視察をしてもらおう」
まあ、治安については問題ない。この街は俺の居城なのだ。王都の偉い人たちからは、実質的に俺が領主扱いされている。もともとはダンジョン管理局が代官を指名している状態で、いわば国の管理下にあるようなものだった。それだけに、あの怠慢な管理状態は国王の怒りを買ったわけだ。
とりあえず俺を差し置いて、この街の領主に収まりたがるヤツはいないだろう。
「おお、それなら」
ロゴスも顔を綻ばせる。可愛いエミリオ殿下は、国民に大人気なのだ。その事実が本人に災いを呼びかねないほどに。
「そうですね。まあ順番に実現していきましょう。これはアルさんの念願だったからね」
そう、ロゴスは俺が稀人だと知っている。
向こうから聞いてきたのだ。目こそ茶色いものの黒髪を想起させるダークブラウンの髪の持ち主で、国王に似た雰囲気の容貌。真理のスマホデータや肖像画でお目にかかった国王も、俺や真理と同じで日本人としてはやや彫りが深い顔立ちだった。
そして圧倒的な力。まるで伝説の稀人（武のこと）を彷彿とさせたと。ロゴスは、この国の

初代国王をとても尊敬していた。
「あと、仕事してくれる人に教育や融資も必要だな」
「そちらはお任せください。エリさんたちもおりますしね」
今、エリたちはスタンド形式でいろいろ試している。他にやりたいと言ってくる人も出てきたので、追加機材を渡して、エリに教育を頼んである。
その人たちには、この後、食堂や屋台での指導員をやってもらうことになるだろう。

俺はアドロスの街外れに移動した。
「ラーメン研究所」
大きめの建物には、日本語でそう書かれた看板が掲げられていた。街外れにラーメン研究所なるものを作ってみたのだ。名ばかりではあるが、所長はもちろん俺だ。建物自体は、元からあった工房のようなものを強化・改造している。
異世界でも食いたいよね、本物のラーメン。インスタントはもう飽きた。
手持ちのガス器具も多少はあるが、一応竈(かまど)でやることにした。なるべくこの世界にあるものでやると、後々まで残るしね。携帯ガス器具では、火力も足りないだろう。魔道コンロもあるが、一般的に高価だ。

竈以外の調理器具や、氷魔法の冷蔵庫も用意した。アイテムボックスは使用しない。さすがに一般人にほいほい持たせるのはキツイだろう。

ここでは、来たる〝ラーメン横丁プロジェクト〟に備え、麺やスープの研究をやらせている。王都で燻っている、店を継げない人物をスカウトしてきたのだ。彼らには立派な店を持ちたいという夢があるので、俺はヤツらを焚きつけた。

「ラーメン屋の親父になる覚悟があるのなら、全面支援してやろう。やれ、やるのだ。この世界中に、お前ら全員でラーメンチェーンを築きまくれ。初代国王の生まれた世界で最も愛された食い物屋を広めるのが、お前たちの使命だ！」

かなり独断と偏見が入っているし、相当無茶を言ったが、結構その気にはなってくれたようだ。

建物の中はかなり広いので、10チーム、総勢20名の構成となっている。お互いにディスカッションしてもらい、知恵を絞って頑張っていた。皆同じような境遇なので仲がいい。そして夢を語り合っている。ついでに俺も混ざって、ネットから落とした資料を広げて、ビール片手に欲望の限りを熱く語っておいた。

「やっぱり札幌ラーメン、それも味噌だよな。細麺の喜多方ラーメンもいけるぜ。ラーメンではないが、長崎チャンポンも捨てがたい」

自分では絶対にやらないが。

ネットのレシピや知識を元に、材料も提供して試行錯誤した。参考になるのは地球から持ち込んだ焼きソバ麺かな？

一応、カップ麺やインスタントラーメンもあるが、そんなものが食いたいわけではない。もちろん参考にはしてもらった。画期的な食い物なので、彼らにとっても衝撃だったらしい。だが、化学調味料や添加物、塩分については警告しておいた。

日本から持ってきていた〝小パック入りの削り節〟は貴重だ。

その他、醤油、味噌、酒、肉類、野菜類、スパイス。また、日本の調味料や食品をアイテムボックスで分解して、そこから得られた素材やカレー粉などもある。ラーメン屋さんのカレーもありだ。

この異世界産の肉やガラも盛大に使う。なにしろ魔物という素材があるのだ。日本にはなかった味ができるに違いない。期待に思わず喉が鳴る。ただ、自分でラーメンスープを作った経験などない。ネットの知識と、彼らの腕だけが頼りだ。

うどんを一緒にやってもよかったんだが、中途半端になりそうなので、別のところに開発を頼んでいる。かつてパン生地を作っていた工房で、試作を依頼したのだ。

その工房には職人さんがいたが、今は細々と別の仕事をしていた。働いてくれないかと聞い

てみたら、条件次第でＯＫだという。材料や設備は当然こっち持ちで、１日銀貨１枚で話を決めた。そこそこ年配の方なので、熟練の職人さんでも賃金はそれくらいらしい。

最近、ＰＣスキルに翻訳機能があるのを発見した。文書でも翻訳できるのだ。それを発見した時は大変な衝撃だった。これがあれば、字が読めなくてあんなに苦労しなくてもよかったのに……。

早速、うどんのレシピをネットからいくつかダウンロードする。それを異世界側の言葉に翻訳して、アイテムボックス内で紙に合成した。

それを参考に、とにかく１回うどんを作ってみることにした。１時間こねたりして生地を作り、その後に寝かせたりした。とりあえず作ってくれた物を、いつも使ってる粉末スープで試食する。おお、案外といけるな。地球から持ってきた、25円の激安白玉うどんの味はあっさりと超えた。

日本にいる時に近所のうどん屋で食べた、イベリコ豚スープのつけうどんは旨かったなあ。そういうのを作れるかと職人さんに聞いたら、昔は料理屋をやっていたので大丈夫との返事。よかった。うちのスープは味が薄くてね。出汁として使うようなものだから。

この出汁から肉スープを作ってもらう。塩、醤油、みりんを使って、いろいろ作ってみる。肉は安い豚肉だ。結構匂いが広がる。そういや換気扇もないんだよな。配合や水の量を変える

など、いろいろ試してもらっているところだ。
ふと視界の隅で何かが動いた。〝ミミ〟が見える。なんていうか、耳じゃなくてミミって感じの可愛いヤツが。そーっと、可愛い頭がちらっと覗く。耳の形からすると狐っぽいな。目が合ってしまった。ミミがさっと引っ込んだ。そのまま知らん顔をしていると、物陰から「ぐ〜」っという音が聞こえる。そっと脅かさないように声をかけてみた。
「よお、お腹が空いているのか？」
再びヒョコッと小さな頭と可愛らしいミミが現れ、コクンと揺れた。
「そうか。じゃあ食っていけ。試作品だから味は保証しないぞ」
「ホントに？」
子供は嬉しそうな、ちょっと驚いたような声で聞き返した。
少しもじもじしながら続ける。
「ほかのこも、つれてきていい？」
「ああ、構わないよ。これから作るから、ちょっと時間がかかるが」
狐っ子は思いっきりダッシュした。後ろ姿が可愛過ぎるなあ。俺は顔に浮かび上がる笑みを止められなかった。
「あの子たちゃあ、みんな親が死んで孤児なんでさあ。隣の国に比べたらマシだけど、やっぱ

り獣人の子は扱いがねえ」
「そうですか」
切ないねえ。これも異世界の実情か。
「ケモミミの子供たちは、孤児院には入れてもらえないんでさ。もっとも、この街の孤児院は、ちょっとアレな状態ですからねえ。それもいろいろ良し悪しでさあ」
さてと、うどんを作っておかないとな。作っておいた麺棒でガツンと麺生地を伸ばしていく。製作中の各段階のものをコピーし、包丁でなるべく形よく切る。スープも試作品を全てコピーした。
これで、どこからでもやり直せるぜ。チビどもが何人来ても大丈夫だ。スープもいろいろと作ってもらっているところだ。

そうこうするうちに、ぴょこぴょこと可愛いおミミさんたちが現れた。
「つれてきたー」
狐っ子が可愛く声をかけてくる。全部で5人か。床に厚手のアルミ蒸着マットを広げた。その上に毛布を敷いて、クッションを並べる。足を短くしたアルミテーブルを飯台にした。毛布に、モフモフしている子もいるな。ぐっ、可愛いぜ。

4章　おっさん、フードコートをオープンする

日本は今頃ゴールデンウィークかあ。もう随分縁がない言葉だ。長い事引き篭もっていて、宝くじで8億円も手にしたかと思えば、異世界へ来てしまったしな。

そんなある日、アドロスの商業ギルドから商品入荷の知らせが届いた。王都の商業ギルドに対して、入荷次第こちらの商業ギルドへ届けるよう頼んでおいたものだ。

まず小豆と蕎麦、かつお節、米だ。米については、植えればちゃんと育つヤツを頼んでおいた。かつて、日本の米の80％の品種は愛知県で生まれたと習った。そのＤＮＡが俺の魂を刺激する。

入荷の知らせを聞き、両手にチビのご飯を持ったまま商業ギルドに転移してしまった。膝の上に載せていたチビは、突然の転移にキョトキョトして周りを見渡していた。

「あたちのごはんはどこ？」みたいな感じで。ご飯を見つけたので、おっさんに催促する。

「うー」

この子はあまりにも幼くしてストリートチルドレンとなったために、言葉を覚える時間がなかった。これからいっぱい喋りだすだろう。

落ち着いてチビにご飯を食べさせ、足りなさそうだったのでカップケーキを持たせておいた。
ロゴスが生暖かく見守っていた。何となく俺まで見守られている感じがしたのは気のせいか？
「はは。そんなに慌てなくても、品物は逃げやしませんよ」
「いやあ、お恥ずかしい」
俺も大笑いだ。いや、日本人ならこれくらいは普通だよな。
「稀人に取っては大切なものなのでしょうなあ」
「初代国王が見たら、抱きしめて人目もはばからず号泣したでしょうな。あるいは、ただ黙って手にした物を見つめて、はらはらと涙を落とすか。それほどのものですよ」
「それほどの……」
ロゴスも感慨深く呟いた。
「まあ、私はたまたまいろいろ持って来られたので、泣きはしませんが。それでも今日入荷した物品は嬉しいですねー」
お目当ての品を大量ゲットでほくほくだ。チビはよく分からないようだったが、俺の様子からきっと素敵なことが待っているのだろうと判断したらしい。じーっと俺を見つめている。
「ふっふー。おいちいの、いっぱい作るからなー」

抱き上げて、一緒にくるくる回ってしまった。チビも猫耳をピコピコさせて、尻尾をゆらゆらとご機嫌そうに動かしていた。

ケモミミ幼稚園に戻り、調理実習室でまず小豆を煮ることにした。おっさんも、今はすっかりここが生活空間だ。そういや、おっさんだって異世界ではホームレスだった。お金は山盛りあったが、家はなかったんだよな。

「頼むぜ、大将」

「任せといて～」

屋台の大将こと、エリにも応援を頼んで、なんとか粒あんを完成させた。いつかあんこが手に入ると信じて、水飴や白砂糖も用意してあったのだ。その他、最中の皮、大判焼きの生地、小倉トースト用の食パン、あんドーナツ、おはぎ、大福、ドラ焼きの生地なども作ってあった。たい焼きやお汁粉も準備万端。

エリーンなど密着警護の体勢になっているし、子供たちも試食スタンバイＯＫだ。

エリはもう手馴れたもので、一発であんこ製造を成功させた。

園内に素晴らしい拍手が沸き起こる。

おやつタイムにしては、ガッツリだった。至福のひと時だ。おっさんの体のままだったら、お腹の肉が絶対にヤバい。再生のスキルに大感謝だ。

晩ご飯は早速ソバをチョイスする。醤油、みりん、出汁で簡単なつゆを作った。出汁は日本から持ってきた食い物の分解品や粉末うどんスープだ。また塩、酒、砂糖入りのバージョンも作ってみる。

みんなで、キャーキャー言いながら作った。エリはソバ打ちまで、あっさりとこなした。

恐ろしい子！

エリーンも真剣な目つきで、割と上手に作った。なんてヤツだ。

「こいつは食い物がかかると神がかりな才能を発揮する」とエドが言っていたが、本当だな。俺や子供たちが作ったボロくなったヤツはもうソバがきに供された。しかも美味しくない。普通は、最初からソバがきとして美味しくなるように作られているんだぞ。

米は試しに炊いてみたが、微妙なできだった。もったいないので、潰して平たいパンのようにして焼いてみた。味噌で焼いたら、なんとか食えた。当分は持ってきたヤツのコピー品の出番だ。コシヒカリなんで美味しい。

他にスペシャルな米も持ってきてあるのだ。

異世界生活が5カ月半を過ぎた頃には、フードコートもプレオープンできた。なんと国王陛下と宰相が視察にやってきてくれた。

これは助かるなあ。御付きの人もたくさんいて、20人くらいの団体さんだ。
俺と代官、ロゴスとフードセンターの所長が雁首揃えて出迎えた。
まず施設の案内をする。馬車が着くターミナルステーションから回った。乗り合い馬車や貴族の馬車が、乗りつけられるようになっている。
屋台村の横からパーキングゾーンが始まり、屋台村、催事場広場、フードコートの裏まで貴族用第1パーキングがあり、そこからロータリーで転回するようになっている。
第1パーキングがいっぱいの場合は、直進して野外劇場裏の第2パーキングに移動してもらう。ここもロータリーになっているので、事故がないように第2パーキングの出口から第1パーキングへ出る際には交通整理の係が誘導する。
それでも収まりきらない場合は申し訳ないが、施設の向こう側にある整地された場所へ馬車を移動してもらう。
野外劇場の正面にはＶＩＰパーキングがあるので、空いていればそちらに誘導される。
フードコート正面には、乗り合い馬車のパーキングがあり、一般客が乗降する。
馬車は頻繁に走る予定で、盗賊などが出ないように馬に乗った冒険者がパトロールする。王都側とアドロス側の双方から出してあるため、その機動力は高い。
各地に詰め所もあり、当初は精鋭をもってなる王国騎士団が人を出してくれる予定だ。王国

騎士団がそこに「1人いるかもしれない」というだけで、どんな盗賊団も震え上がる。そもそも、王国騎士団が犇いている王都付近で盗賊稼業をやっている酔狂なヤツも少ない。

そして屋台村。ここは屋台前に簡単な椅子があるだけだ。アーケードの屋根がコの字型に施設を囲んでおり、庇のように突き出ていて、雨の日でも濡れずに馬車から降りることができる。暑い日の日差しも防いでくれるはずだ。

その隣に催し物の広場があり、屋根付き連絡通路を介してフードコートの建物がうかがえる。

フードコートの中には店舗が軒を連ね、真ん中には白いテーブルや椅子がズラリと並ぶ。ゴミ箱もしっかりと設置され、掃除係も常駐。そのあたりは、地球のフードコートと同水準の清潔さに保たれている。ここが一番苦労したところだ。だが、ロゴスの肝煎りなので、彼らはあっさりとやり遂げた。この世界では、実に賞賛に値する出来事だ。

ショーケースの中に食べ物が並んでいたり、食べ物の説明が写真付きで書かれていたり、メニューの看板も立てられている。

この辺はパネルや看板を、アイテムボックスに入れて写真と合成したものだ。将来的には絵で表示かな？

いろいろお持ち帰りもできるようになっている。藁半紙の袋や、紙バッグなどが包装用に準備されているし、貴族向けには木の器なども用意されている。ビニール袋やプラスチックのパ

ック容器だと散らかされて、ゴミになるとまずい。いつまでも残ってしまう。
中は魔道ランプで明るく照らされ、お土産屋も用意されている。ゆっくりできるカフェもあり、なかなかモダンな内装だ。とりあえずは、コーヒーやココア、コーラやサイダーなどが用意される。そのうち、この世界で自力調達できる飲料に切り替わっていくだろう。
そして、ラーメン横丁。これは10店舗用意した。最初はラーメン研究所の人間総出で運営する。ここでは、いろんなラーメンが食べられるのだ。細麺から太麺、日本各地のスープを参考にしたスープ。いずれは冷やし中華やつけめん、混ぜ麺なども着手してもらう予定だ。名古屋の台湾ラーメンなんかも悪くはない。涎が垂れるぜ。
その向こうには屋外劇場が用意され、音楽会や芝居を開催している。ステージは屋根付き、客席は露天式だが、実はアイテムボックスが設置されており、その中から屋根を出すことが可能だ。
既にセッティングされた魔道具なので、係がボタンを押せば一瞬にして屋根ができる。普段は屋外の爽快感が楽しめる。冬場には風魔法と火魔法を合わせた暖房も完備されている。
国王といえども、異世界の人には馴染みのないスタイルばかりで、驚きをもって迎えられた。
「これはまたいろいろと作ったものだな。稀人式のスタイルか。面白いものだ」
「たぶんこれから、ある程度の施設にはフードコートが作られていくのではないでしょうか。

とりあえず、今はここでしか食べられないものも多いですが」
俺は、頬が緩むのを抑え切れない感じで説明する。見えない尻尾が勢いよく振られていたかもしれない。
「本来はそれぞれの目的の施設で、多数の客に簡易に食事を提供する目的で作られるのが、フードコートと呼ばれるセルフサービスの食堂なのです。ここは最初にフードコートを作るのが目的なので、他がおまけですね」
そして改めて説明をしておく。
「これらは……稀人が見たら涙を流して喜ぶものです。初代国王が夢見て果たせなかったであろうもの。彼が今ここにいたら、涙を流しながら嗚咽したでしょう。ぜひお土産に持って帰って、初代国王の墓にお供えください」
「そうであったか……。では、そうさせてもらうとしよう」
そう聞くと、国王陛下としても、思いは一入（ひとしお）のようだった。
「ちなみに、初代国王の妹さんの話によれば、彼はあんこ系の食べ物が大好きだそうで、お勧めはお萩、たい焼き（粒あん）、大判焼きですかね。団子も好きだそうですので、みたらし団子もお勧めです。今度あんこの団子も作って、お供えに行こうかなと……って、あれ？　どうかなさいましたか？」

国王陛下の様子がなんだか変だ。
「今、何と……言った？」
「は？　いえ、初代国王はあんこが大好きであったと」
「そうではない！　今、初代国王の妹と……」
国王陛下は少し興奮気味に叫んだ。
「ああ、船橋真理さんとおっしゃいます。今、日本、ああ稀人の国の名前ですが、そこにも墓を作り、毎月の命日にはあんこのお菓子をお供えに行っているそうです。仏壇も買ったようです」
「初代国王の妹御と話を？」
ん？　やけに食いついてくるな。
「ええ、連絡手段があります。初代国王が行方不明になったのは、向こうの時間で2年も経っていませんし」
「な、なんと……」
国王陛下は棒立ちである。ボクシング中なら致命的だよ。
なんかすごいショックを受けたみたいだ。まあ自分もショックだったけどね。そうか、彼女、こっちの世界では王族ということになるのか～。

「どんな方であるのかのう……」
「真理～」
俺は真理を呼び寄せた。
「なあにー」
「ちょっと、こっち来てー」
いいからいいからといった感じで手を振り、真理を招き寄せる。
「何かしら？」
「陛下、これが真理さんです」
「な、なんと……知らぬとはいえ、とんだご無礼を！」
は？　王様が跪いちゃったよ！　なぜ？
臣下たちが慌てる。陛下を諌めようとするもの、陛下にならって跪く者。
初代国王の妹、そんなに偉いのか？　本物の真理さんが見たら目を白黒するぞ。もちろん全て撮影済みだが。
「陛下！　違う、違いますって。何言ってるんですか？　皆さんも！　話は最後まで聞いて。この子は迷宮の番人だって紹介したでしょ。いいですか？　初代国王、船橋武さんは早くにご両親をなくし、苦労して10歳年下の妹さんを男手一つで育ててきました。だけど、こんなこと

になってしまって。故郷に帰りたくて転移の腕輪まで作ったのに、とうとう帰れなかった。それでも一目、妹に会いたくて。それで、彼女を作ったのです。この子は名前も姿も、彼の妹である船橋真理さんから取っているのです」

一気にまくしたてて、息を継いで続けた。

「この異世界で人生の終わりを迎えるにあたり、ダンジョンの奥底に彼女の安住の地を作ったのです。彼の死後、真理が悪い連中に狙われないように。あそこならドラゴンもいますから。さらに伝説の指輪と、この国の未来を彼女に託しました。１０００年待っていたって言ったじゃないですか」

「そ、そうであったか。そういえばそうじゃったの。とっさなことで慌ててしまった。ふむ。これが初代国王の妹御の顔か。確かに肖像画の面影があるのお。わが真祖、初代国王は１０００年の時を越えて、この国で尊敬を受け続けておる。その係累とあっては、下に置けぬどころか、わしよりも上の存在じゃ」

そこまで？　真理さんをからかうネタができたなあ。

「ちなみに」

俺はそう言うやいなや、高さ２ｍの超特大タブレットを出した。

「これが妹さんの写真です」

5章　おっさん、帝国へ行く

日本では6月8日にあたる、異世界へ来て6か月半が過ぎた頃。

アントニオは隣国でAランク試験に臨んでいた。

ヤツには、通信用の魔道具を渡しておいた。

世界の魔素の海を、魔力で揺らがせて情報を伝える方式だ。真理が魔素の動きに敏感だったのをヒントにして作成した。ベースは俺のスマホだ。

バッテリーの代わりに魔石を使用した。ほぼスマホをベースにしているのに、何故か魔石の魔力でちゃんと動く。周囲から魔素を集めて魔力に変えるコンバーターを搭載しているのだ。通信に必要な魔力はたいした量ではないので、自動で集めてくれる。使い過ぎたら、自分の魔力で急速充電することも可能だ。もともと通信用の機械だからだろうか？　自分でやっていてなんだが、この世界は本当に不思議だ。

伝達方式は、電線経由での通信をイメージした。魔素という広大なエネルギーの海を、魔力という信号波が駆け抜けていく。

とりあえず、携帯のように会話ができる。どうせなら可愛い女の子に贈りたかったよ。転移

して通信状況を確認したが、魔素が続く限りはどこまでも通じるようだった。
個別信号の識別ができないので、今は俺とアントニオのホットラインだ。
既に園の子供たちは、「それって何かいいものなの？」みたいにロックオンしている。特に女の子。なんで、女の子はあんなに電話が好きなんだろう……。
図画工作で糸電話を作らせてみたが、みんな大喜びだ。
「もちもち？　もちもちー？」
おチビ猫娘も夢中だ。最近は、よく喋るようになった。もう1歳9カ月になったものな。思わず、俺の目も細まるぜ。
一応は、風魔法で声を届ける方法はあるのだが、魔法が届く距離が限られる。王国は何か手段を持っているようだが、緊急用の物で技術流出に五月蝿いようだから遠慮した。
パーティを組むと〝念話〟というものが使えるが、隣国までは届かない。そこで、今回は通信用の魔道具を用意したわけだ。よっぽどのことはないと思うが、最近の情勢はかなりきな臭い。
俺は違うが、あいつは王国貴族に返り咲く予定だ。しかもSランクの伯爵に。もし隣国との戦争になったら、アントニオも出ることになるだろう。果たして隣国が何も仕掛けてこないといえるのか？

ヤツから定期連絡が来ることになっている。これがない場合、一度俺が見に行くことに取り決めた。不法入国は拙いので、国境だけはちゃんと通る。幸い今のところ、そのようなことはない。

隣国。ベルンシュタイン帝国と呼ばれる、通称【帝国】。

皇帝の下、貴族の権限の強い国だ。平民は家畜も同然、獣人のような亜人は基本的に奴隷でしかない。そして、領土拡張の野望に燃える国家だ。元は小国だったが、周りの国を併合して、今に至る。嫌な国だな。あんまり行きたいと思わない。面白いところもなさそうだ。

とりあえずは、どうすることもできんしな。

というわけで、お遊戯の時間だ。

「じゃあ、みんな。今日は『結んで開いて』やるからな」

みんなには可愛いスモックを着せてある。そのうち、お遊戯の発表会とかもやろう。ケモミミ幼稚園は今日もマイペースだ。

お遊戯の時間も終わって、今日の工作は折り紙だ。こいつら、本当に油断がならない。ネットでダウンロードしたハイパー折り紙とかをガンガンやっているし。

折り紙をさっさと終わらせて、ダウンロードした型紙の紙飛行機製作に熱中している。ちっちゃい子にハサミとかドキドキするが、今のところ指を落としたヤツはいない。第一そのため

にグレーターヒールとかを習ってきたのだ。御代(おだい)は日本円にして、約20億円だ。
危なくないように紙飛行機の先端にスポンジを付けるように言いつけていると、通信用の魔(マ)道具(ホ)が鳴った。子供たちの注目がすごい。女の子が食い入るように見て、耳がピンッと立っている。
「どうしたアントニオ、こんな時間に」
「ちょっと相談がある。こっちに来てくれないか？」
「ああ、いいけど」
それから、チビどもに向かって、お出かけの挨拶をする。
「じゃあ、おいちゃんは、ちょっと用事で出かけてくるので」
「「えーー」」
「おみやげはー？」
「なるべく期待に応えよう」
帝国に子供向けの土産なんかあるのかよ。その点だけが心配だな。
さっさと転移魔法で移動する。さらっと国境付近へ現れ、徒歩で国境へと向かう。
エール河。幅数キロの大河を渡れば帝国だ。いろいろ五月蝿いので飛行魔法のフライは使わず、船で行くことにする。面倒くさいな。

船はまた、たいしたものじゃない。全長８ｍくらいの、限りなく筏に近い代物だ。客は30人ほど乗っている。この河には大きな魔物が出る。よくこんな筏で渡る気になるな。そういえば船は作っていなかったので、今度作って遊ぼう。子供が河に落ちないようなヤツにしないとなあ。屋形船とかも捨てがたい。

ふと見ると、すぐ近くの水面が持ち上がり、そいつは巨大な鎌首を現した。Ｂランクの魔物、ここの名物ともいえる河ヘビだ。

俺はレーダーで見ていたので、そいつの存在を知っていた。軽くエアカッターを飛ばして首を切り落とす。普通のエアカッターなら軽く弾き返すＢランクの怪物だが、俺の魔力がたっぷりと練り込まれたものは威力が桁違いだ。Ａランクの魔物の首さえも落とせるのだから。そして、死体は目視でアイテムボックスに収容した。

やっと向こう岸に着いた。フライを使えば楽なのだが。

国境の詰め所は、色気もへったくれもない、兵士の詰め所みたいな建物だ。灰色のコンクリートっぽいもので、周りを鉄条網で囲んでいる。突破すると機関銃で撃ち殺されそうだ。もっとも、この世界でそんな物騒なものを持っているのは俺だけなのだが。

詰め所へと向かい、越境手続きのために並ぶ。

「おい、貴様あ」

誰か叫んでいる。ここの兵士か？
「おい！　聞こえんのか？」
あれ？　俺の方に寄ってくるような……。
俺の目の前に、若いが厳つい顔をした兵士が立った。
「何か御用ですか？」
「用も何も、さっさとこっちに来い！」
そして、階級が高そうな兵士がすっとやって来た。根性曲がりな顔をしている。何となく用件の察しがついた。しかし、そのまま大人しく連行されていく。
「おい！　お前、ここがどこだか知っているか」
「国境警備所でしょう。知らないで来たとでも？」
「何だと！」
「まあまあまあ、隊長。貴方もそんな口の利き方をしてはいけません」
宥める口調のような若い兵士。だが目は濁りきり、とことんまで腐っている。これも日本でお目にかかったことがある。笑えるな。
俺が金持ちそうな商人風の格好をしているし、人のよさそうな顔もしているしな。さてどうしたいのか？

「貴様は我々を舐めきっている。そんなヤツはどういう目に遭うか！」
舌なめずりをしているそいつを見るだけで、もう帝国がどういう国なのかよく分かった。俺と絶対に反りが合わないことだけは確定した。
「隊長、まあまあ。君、ちょっと」
若い兵士は俺を手招きする。
そして小声で、耳元に囁いた。
「ダメじゃないか。偉い人を怒らせちゃ。ここは私が宥めてあげるから。だから、ね！　分かるだろ？」
「何が？」
若い兵士は驚いて聞き返す。
「何がって……」
何かこう困惑気味だ。そりゃそうだろうな。普通なら泣いて跪き、許しを請うシーンだ。それを上から眺めるのが大好きという面構えの連中である。
「じゃあ用がないなら、俺は詰め所に戻らせてもらうぜ」
俺はスタスタと勝手に歩き出す。
身分の高い方の兵士が顔を真っ赤にして、今にも俺に掴みかからんとした。

「隊長、抑えて抑えて。君～」
そして、若い兵士は、俺が被っていた上っ張りを引っ張る。外れた下から見えたものは。
【アルバトロス王国侯爵位を顕す紋章入りのマント】
「責任者の方と、お話したいんだが」
貴族のマントを翻し、振り向いた俺の台詞に凍りついた若い兵士。俺が上に着込んでいた、大きな上っ張りを手に持ったまま、彫刻のように固まっている。隣国の貴族、しかも侯爵を国境警備兵が脅したのだ。国際問題である。俺は若い兵士に声をかけた。
「おい、俺の上着を返せ。河の上は寒いから羽織っていたんだ」
ノロノロと上着を渡してくる兵士。上役はどうやって、このピンチを逃れようかと必死に考えを巡らせている。
「ところで用というのは何だ？」
若い兵士の驚いたような顔が目に入る。
「お前らが、用があるというから付き合ってやったのだぞ？　貴族、しかも侯爵たる私が。何とか言ったらどうなんだ、平民。ん？」
「はっ、はっ。そ、それは……」
俺の強気な上から目線の台詞に、隊長がえらく下手に出ていた。わざと乱暴に言ってやる。

6章　おっさん、貴族の悲哀を知る

俺とアントニオはアルバトロス王国の大使館へ向かい、在ベルンシュタイン帝国大使に面会を求めていた。大使館は趣のある建物で、アルバトロス風に作られた柔らかい感じに思わずホッとする。

丁重に中へ通されて、趣味のよい応接間で待たされた。ほどなくして、大使が現れる。

既に髪に白いものが多くまじり、年輪を感じさせる風貌。筋骨隆々ではないが、それなりにがっしりとした体躯。少なくとも贅肉は付いていない。穏やかだが、理知的な鋭さを湛えた瞳。だが酷薄そうな顔立ちではない。

これは頼りになりそうな人物だな。

「これは、これは。ご高名なグランバースト侯爵と、そちらはオルストン家の方ですな。私はマリウス伯爵。この帝国で大使を務めさせていただいております。どうか、お見知りおきを。最近のご活躍は耳にさせていただいておりますよ。Aランク試験は頑張ってください」

王国は宣言通り、名誉貴族ではあるものの通常の貴族扱いを供してくれていた。だから大使もグランバースト名誉侯爵ではなく、グランバースト侯爵と呼んでくれている。高名というよ

り悪名だろう。なんせ貴族殺しの異名を取るからな。
まあ実質は〝ケモミミ幼稚園園長〟がメインの肩書きなのだが。最近これが称号欄の先頭に躍り出た。称号って順番が移動するんだな。
大使館のソファは落ち着いた色合いの革張りで、何というか品のある豪華なタイプだ。イタリア製の高級ソファを思い出す。さすがは大使館だな。部屋の壁や調度品も華美ではないが、好感の持てる上品さだ。ケモミミ幼稚園とは大違いだ。
女性がお茶を持ってきてくれた。お茶自体も上等だが、お茶請けのお菓子が気になる。なかなかの物のようだが、王国産なのか、帝国産なのか。手の中に握り込んでコピーする。これで、チビどもへのお土産を早速1個ゲットした。いつ逃げ帰る羽目になってもOKだ。この辺の感覚が、小僧どもとは違うおっさんの強みだ。
「その件で大使に確認したいことがある。この男だ」
俺はニールセン侯爵らしき人物の写真を見せた。
「ふむ。ニールセン侯爵ですな。彼が何か？」
初めて目にするだろう写真を見ても、眉一つ動かさずにスルーできるのは、この人の力量ではないか。もしかすると、俺が稀人だと聞いているのかもしれない。
「彼の手の者がアントニオをつけ回している」

「それは確かな情報で？」
大使は真っ直ぐ俺を見て言う。
「この目で確かめた。えらい人数を動員していた。とりあえず、ざっと50人はいたな」
外交の修羅場を潜っていそうな大使は、ふうっと溜め息をついて語り出す。
「このニールセン侯爵は、いわゆる急進派というヤツでして、同じく急進派の第2皇子シャリオン殿下の関係者ですな。殿下のフィアンセが、パシオン侯爵家のお嬢さんでして、これがニールセン侯爵の姪にあたります。ニールセン侯爵は、軍にいた頃、瞬神ニールセンと異名をとったほどの傑物です。無闇に動きはしませんが、容易周到に立ち回り、いざという時には疾風の如く駆け抜けます。手ごわい人物ですよ。貴方たちは連中の企みを潰しましたからね。恨まれていますから注意が必要でしょう。特にアントニオさんは、Aランク試験に合格すればそのままSランクの王国上級貴族に列せられます。それも、【武神】とも称えられた一族の。紛れもなく、アルバトロス王国に喧嘩を売ってきている帝国が、最も排除したい人物でしょう。今なら一冒険者として始末できますので。この帝国内でどうにでもできます。グランバースト侯爵については、正規の王国貴族扱いなので、手を出せば外交問題になります。しかも義務を持たない特殊な名誉貴族だ。しがらみがない分、手を出されれば帝国相手に大暴れもできる。連中も無理はしないでしょう。あと、貴方に手を出すとやっかいですから」

大使は、こちらを見て意味ありげに微笑んだ。こ、この大使！
ええのか？　ん？　やってしまってもええのんか？
「それはやっかいな連中が敵に回ったもんですなあ。はあっはっはっ」
それに呼応して楽しそうに笑う俺。初老のおっさん同士の阿吽の呼吸。
この狸と破壊神のやり取りに、アントニオが顔を顰めたが文句は言えない。俺を呼んだのはヤツ自身なんだから。
俺と大使は、狐と狸の化かしあいのような会話を楽しんでいた。彼も俺のことは気に入ってくれたようだし、同年代同士、実に気が合う。爺の飲み友達は貴重だねえ。
何より菓子が美味かった。ミルクや特殊な砂糖の使い方が絶品だ。貴族御用達の品だな。アイテムボックスで分解して、原料の砂糖を入手した。地球にはない代物だった。せっかくの異世界、こういう物をもっと集めたいな。商業ギルドに頼んでおこう。ロゴスに頼んでおけば、やってくれるだろう。
大使に例の女の写真を見せると、顔が曇った。
「これはパルミア家のお嬢様ですな。一体これをどこで？」
「俺とアントニオをつけ回していた連中の1人だ。ニールセン侯爵邸へ案内してくれたのは、その女だ」

「そうですか。この方も可哀想な人です。皇帝の継承争いに巻き込まれて」
大使は、ちらとアントニオの方を見て話を続けた。
「パルミア伯爵家には何の落ち度もありませんでした。皇太子派の重鎮であったという以外は」
……アントニオのお仲間みたいなもんか。どこの国にもある話なんだな。アントニオも複雑そうな表情で聞いている。
大使は、目に泡沫人（うたかたびと）を思い起こすかのような光を浮かべながら、話を続ける。
「第2皇子シャリオン殿下を推す連中は、皇太子殿下を蹴落とすために、とんでもないことをしました。ご禁制の魔晶石を第2皇子の皇子宮に仕掛けたのです。捕らえられたのは伯爵家の長男。薬で眠らされ、罪を着せられました。稚拙な犯行であり、関係者には全て分かっていましたが、誰かが責任をとらねばなりません。伯爵は自ら長男の首を刎（は）ねることにより、皇太子に責が及ぶのを防ぎました。その後、伯爵と息子3人、並びに主な重鎮は処刑、パルミア伯爵家は断絶。奥方と2人のお嬢様は修道院に送られたと聞き及んでおります。そして、第1皇子ドラン殿下が、皇太子におなりになられました。この話題は帝国貴族の間では禁句とされておりますので、御気を付けください」
こ、これはまた。ロクでもなさに輪をかけたな。
「アントニオ、お前はまだマシだったってこと？」

「うちは継承争いに絡んだわけじゃない。ぼんくらの公爵子息が、違法な密貿易をやらかして表沙汰になる寸前だった。そこで、へたを打って騎士団に一網打尽になりやがった。稀人の教えに従い、王国騎士団はたとえ相手が公爵だろうが、とことんやる連中だ。だが、公爵家を表に出すわけにいかなくてな。あちこちが圧力をかけてきて。当時、うちの兄貴は、そのぼんくらに仕事を手伝うように強要されていた。兄貴は相手にもしなかったさ。武功で名高いオルストン家の長男を、そんなつまらんことに駆り出そうとしたんだ。馬鹿としか言いようがない。だが、そのへんを突かれて、実は無実のアンディ兄貴が主犯という扱いにされちまった。狂気の世界だよ。ぼんくらはだまされて手伝っただけということになった。まあ、その辺は騎士団の手を離れた後のことだからな。それでも公爵家の跡取りが相手だ。いろいろとあってな。曲がったことが嫌いなうちの家系は融通が利かなくて、貴族社会の中では少し浮いた存在だった。王からの信頼は絶大だったが、それがまた妬まれた。そういう潔癖なのも、度を過ぎれば疎まれる。結局、ありえない真昼の暗黒が押し通されて、オルストン家は爵位を失うことになった。幸い誰も処刑されることにはならなかったが。国王陛下が動いてくださったのだろう。ことの収集がつかないため、すったもんだした挙句、爵位剥奪のみの処分で決着となった。今でも……王国の恥として語り草さ」

「その公爵の名は？」

「バイトン公爵。西の公爵家だ。ぼんくら息子はキルミス・フォン・バイトン。女好きで脂ぎった、いけ好かないデブチビだ。当主は現国王陛下の実弟だ。国王陛下は激怒して公爵を王宮に呼びつけたが、ブラキオ・フォン・バイトン公爵はどこ吹く風。逆に陛下を諌めようとして、息子ともども謹慎処分を食らった」

「やるなあ、国王陛下」

俺はちょっと考えてから、口を開いた。

「もし、そいつが俺にちょっかいをかけてきたら、お前の代わりに1発ぶん殴っておいてやろう。SSランクの貴族殺し、竜殺し。この爆炎の首狩りアルフォンスに、公爵子息風情が喧嘩売れるもんなら売ってみやがれ。そいつの先祖の稀人がどういうもんなのか、稀人自ら教育的指導をしてやろう。まあ、あの国王陛下のことだ。後でこっそり呼んで、よくやったくらい言ってくれそうだが」

この話、船橋真理さんが聞いたら泣くなあ。

「はっはっは。ありがとよ」

アントニオも少し気が晴れたようだ。

「そうそう。パルミア家事件で使われた魔晶石というのは、例のダンジョンで使われた、魔素放出石の元になったものです」

大使がタイミングよく補足をしてくれた。
はい、ギルティ。お陰で俺がどれだけ苦労したと……このタヌキ大使様ってば、わざとけしかけているよね？　まあ、それもよし。乗ってやろうじゃないか。
それで国王陛下はブツが隣国にあると知っていたのか。やっかいな隣国の継承争いに使われた危険物だ。面倒事の匂いがぷんぷんするな。
いつ逃げ帰ってもいいように、子供たちへの土産は早めにゲットしておくとしよう。

翌日は、朝からお土産探しの旅に出た。
頼れる俺のバディは大使館の女の子だ。名前はミルティちゃん。なかなかのナイスバディの女の子。結構可愛いし。
というわけで、おっさんはデレデレしながら女連れでお買い物中だ。こういう本国からのお客さんの相手も、大使館の大切な仕事といえる。出世にかかわってくるので。その辺は世界が変わっても何一つ変わらないな。助かるぜ。マリウス伯爵は実に如才ない人物だ。
まずは、気になっていた絵細工。その専門店に案内してくれた。こ、これは～～。
魔道具のアニメだった！
ア、アナログアニメか。これは意表を突かれた。恐るべし帝国。今初めて、帝国に脅威を感

じた。絵細工というからブロマイドみたいなものか、絵を描いた玩具か何かと思っていた。
薄くて丈夫な紙にたくさん絵を描いて、フィルムのようにモーターで高速に巻き取っていく仕組みのようだ。まるで8ミリ映写機か何かだ。
どういう仕組みなのか、後ろから光を当てる魔道具がついており、正面のガラス（？）のようなものに映像を映し出していく構造だ。スクリーンに投影という考えはないようだ。
……この世界の人が独自にこんな仕組みを作っていた？　あり得るだろうか？
もし稀人がこの国に技術協力していたとしたら、帝国に魔導戦車くらいあっても不思議ではない。「モーター」があるんだからな。近代兵器の代わりに「魔砲」を作って搭載すればいい。一般兵士が魔砲戦士に早変わりだ。魔石が動力源となる。火薬の知識もあるかもしれない。
その他にも稀人にはヤバい知識がてんこ盛りなのは、自分のことを考えれば一目瞭然だ。そいつが持っているスキル次第で、まずいことになったりするかもしれない。俺は、一番危険なスキルは生産系だと考えている。
うーん。俺の足は止まってしまった。もし、そんな新兵器が敵方にあるんだったら、王国なんぞ蹂躙されてしまうぞ。魔法だけならおそらくは互角だろう。後は近代兵器対人間の戦いになってしまう。国王陛下に進言すれば、こちらにも作ろうという話になるだろう。
この世界にはあってほしくないなあ。死人の山が築かれるだろう。ただでさえ、命が安い世

界なのに。
「この道具はいつからこの国に？」
ミルティに聞いてみた。
「5カ月くらい前からだそうです」
彼女は不思議そうに答えた。
5カ月……俺が来てからそう経ってないな。
「とりあえずいろいろ欲しいね。ソフトも欲しい」
「ソフト？」
「あ、いやその、違う絵巻も見られるんだろう？」
「ええ、そうですわ」
まあ、お土産にいいのは分かった。真理の意見も聞いてみるか。あと、この国にも稀人がいる可能性があるか大使に聞いてみよう。
とりあえず、お土産探しを続行した。王国にはない絵本を発見。ざっと見たところ、政治色は全くないようだ。さっきのアニメ魔道具のソフトも、そういう発想がないのかな。意外だ。
時折、首輪を付けた亜人を見かける。皆獣人だ。これが亜人奴隷ってヤツか。
「この国の亜人って、獣人さんだけかい？」

「ええ、ほとんどがそうです。たまにエルフさんもいますね」
エ、エルフだと？　いるのか。見てみたいぜ。早速お強請りしてみた。
「見たいなあ、エルフさん！」
ミルティちゃんは、困った顔をして身悶えした。
「そのお……エルフさんとか……は、えーその、大変容姿が美しい方が多い……ので」
なんか、真っ赤になってしまって、しどろもどろだ。あー、そっちの需要でしたか。
「いや、無理言って悪かったよ。次はお菓子がいいな」
まあ、可愛い子が赤面する姿も見られたしな。何軒も菓子屋を回り、なかなかのラインアップとなった。これでいつ退場しても、園長先生の面目は保てる！
帝国遠征は大成功に終わった。
ああ、まだ全然終わってねーや。当分帰れそうもない。まあチビたちの寝顔は夕べも見たけどね。転移魔法万歳。アントニオも転移の腕輪を持っているんだから、いざとなったら逃げればいい。その後に逆襲すればいいんだし。後ろからね。
後は洋服屋を回りまくった。子供服も買い捲りだ。やっぱ違う国だと趣の違うヤツがあるなあ。いろいろと土産物が集まったので、俺もホクホク顔だ。

7章　おっさん、Aランク試験のセコンドにつく

第1試合の相手は、なんと忘れもしない爺。あの暗殺者風の、俺のAランク試験で対戦相手だったヤツだ。アントニオに念話を送る。

（おい、アントニオ、そいつはヤバい暗殺者だ。お前のことも狙っているようだ。速攻でアレぶちかませ）

そして、それはいきなり発射された。爺が暗殺者の動きを始める前に。さすがは魔道鎧を操る一族。初動の大切さを知っている。それは爺を超高速で追尾して即座に命中した。バーカ、てめえみたいなアナクロ爺が近代兵器に敵うかよ。

審判が、勝者の名を告げていた。あー、アントニオのヤツもう勝ったのか。俺なら、すかさずいたぶるのにな～。武道の誉れの一族は甘ちゃんだなあ。

そう。追尾するミサイル魔法に、弾頭としてアレを載っけておいたのだ。前回のAランク試験で俺が爺にぶつけられなくて、肩をプルプルさせていた、あのでかい風魔法の直径５ｍサイズを。なかなか強烈な威力だったようだ。死んだな、ありゃあ。

さて、ここからが本番だ。来るかな暗殺者。アントニオ、そいつは俺の獲物だからな。

結局第1試合の後は、暗殺者は来なかった。つ、つまらん。
2回戦はアントニオの敵じゃなかった。おまけに雑魚だ。俺は周りの警戒に集中していた。対戦相手は、ちょっと余所見している間にアントニオが瞬殺していた。
そして、アントニオが控え室の扉を開けた途端に、いきなり中から襲撃を受けた。だが、吹っ飛んだのは襲撃者の方だった。
（バーカ。アサシン用に自動反応式の対刺客迎撃装置を腕輪に仕込んでおいたんだよ。本人もそれ知らないからな～。お前らも分からなかったろう。試合中には作動しないようになっているのさ。朝に襲撃を受けて、対応しねえ馬鹿がいるかよ。舐めまくってやがるな）
アントニオがジト目でこっちを見ていたので、笑顔で大きく手を振ってやった。
選手がゆっくりと休憩できるのも、ここまでだろう。そのタイミングで襲撃してくるのだから、嫌らしい連中だ。精神的な揺さぶりをかけて、隙を作ろうという作戦か。だが、武門の一族の出身は、面差しに微塵の揺らぎも見せていない。
3回戦が始まった。相手はただならぬ様子だ。頭を剃り上げている。これは、何か軍人の匂いがするな。動きや服装が、軍人を思わせる雰囲気がある。じっくり魔力を込めて鑑定で見ていると、暗殺者・元傭兵と出た。
大殺戮王の称号。人間１０００人以上を、あらゆる手段で殺してきた者が得る称号だと？

解析すると、魔法スキルも半端ない。
いけねえ。こいつはたぶん、魔道鎧対策をしてきている！　ダメだ、はっきりと感じる。
（オイ、こいつはどうだ？　暗殺者か？）
アントニオの念話が飛んできた。
（そうだ。殺っちまえ。たぶん、敵冒険者グループのリーダーかサブリーダークラスだ。生かしておくと、大会終了後に仲間を指揮して、お前を襲ってくる。遠慮はするな、コイツ……元傭兵だ。隠蔽しているけどな。しかも経験豊富で、手練手管に長けている。お前の鎧もヤバいぞ、対策してきてやがる。速攻で始末しろ。躊躇うな。殺せ。アレを使え）
さすが、武功を上げた一門。何の躊躇いもなく、俺の預けたＭＩＲＶを20発全弾撃ち込んだ。弾頭は特大フレアを奢ってある。計４８０発の大花火が、地上で鮮やかに華咲いた。俺は一応周りに何事もないように、完璧にシールドを張り巡らせておく。
終わった後には、猛烈な爆炎によって焼け焦げた試合会場が残るのみだった。まるで地上に小さな太陽が落ちたかのような惨状だ。
そして、ベスマギル動力により、以前とは比べ物にならないほどの輝きを放つ魔道鎧を着込んで、その場に微動だにしないアントニオがいた。
以前の魔道鎧は、目視で見えるほどの魔力で体を覆い纏わせていたが、今は半ば物質化した

ような存在感で輝いている。俺の魔道鎧に近くなっている。
拡大したレーダーＭＡＰで確認すると、最初から1歩も動いてねえ。こいつも本当に大概だよな。
こそーっと、ヤツのアイテムボックスに目視で、今使った分のＭＩＲＶを補充しておく。
あれだけ派手に相手をぶっ殺したことは、特に問題視されなかった。Ａランク試験って、こんなに殺伐としたものだったのか。あるいは、この国だからなのか。それともアントニオを殺しにかかっているからなのか。俺の時は、当事者だったからよく分からんな。

いよいよ最終予選だ。このあたりになると試合も立て続けだ。
相手は何だか嫌な感じがする。これは……まさか、もしかしたら……。
いくつか魔法発動の準備をした。回復魔法も用意する。
（おい、気を付けろ。こいつヤバい。何かとんでもないことをしてきそうだ。へたをすると、お前を殺すためだけに、観客まで巻き添えにする気かも。油断するな。お前を殺すことを最優先にしているイメージだ）
（了解した。俺も嫌な感じを受ける。掴みどころのない嫌な感じだな。戦場ならば一時撤退のケースだ。お前がいてくれてよかった）

何だろう？　注意深く観察していたが、向こう側の観客、相手選手の後ろが崩れ落ちるのを見た。すかさず鑑定してみたら、毒ガス中毒（重症）と出た。

（ヤバい、毒ガスだ。魔道鎧で吹き飛ばせ。風魔法で空気を呼べ）

アントニオの鎧が輝きを増した。そして、中で風魔法を使い空気を生成している。

次の瞬間、会場の人間がバタバタと倒れていく。

「審判、あいつをなんとかしろ。会場に毒を撒いてる」

俺が叫んだ。審判が慌てて騎士団に合図を出した。だが、次の瞬間に審判も崩れ落ちる。

騎士団が出てくるが、これもバタバタ倒れてしまう。

男も倒れた。自らの放った毒によって。凄惨な笑いを浮かべて死んでいった。なんて野郎だ、滅茶苦茶しやがる！

「ゴッドポイズンヒール」

エリアヒールの要領で、会場中にぶち広げていった。

凄まじいＭＰ消費だ。１京ＭＰ単位で消耗していく。あまりの燃費の悪さに驚愕した。魔法を本来とは違う使い方をしているので、輪をかけて消費が激しい。車の燃費に例えるなら、さしずめリッター10ｍってとこか。ガソリン満タンで１㎞走る前にガス欠する。

やがて、会場中の人間が回復して起き上がってくる。死んだ人はいないようだ。犯人以外に

は。ベスマギル製造以外で、こんなにＭＰを食うとは。ＭＰ馬鹿食いで、強引に効果１００％を達成する特殊魔法だからな。効果は絶大なんだけどさ。課題達成型魔法の重大な欠点だ。そのメリットは欠点を補って余りあるが。

通常ならば、俺以外には使えまい。俺が信頼してベスマギルバッテリーを与えたヤツ以外はな。

試合が始まってすらいないのだが、相手の反則扱いでアントニオの予選突破が宣言された。多くの人は、何が起きたのかすら分かっていないようだ。

しかし、どうなっているのか。これほどの騒ぎがあったにもかかわらず、そのまま決勝が行われるようだ。帝国め、なんて無茶をしやがる。イカレてやがるな。

しかし俺は、今回の件でゴッドエリアポイズンヒールを獲得したようだ。

そして、本戦第１戦は、なんとあの呪われた鎧男だ。どうしても、こいつは本戦まで来るよな。やっかいだもの。人化ドラゴンは今回落選したらしい。どうせまた変な拘りかなんかで、負けを宣したんだろう。前回、俺が決勝で戦った魔法使いもいないし。

鎧男への対策は、３つ用意しておいた。

１つ目は俺のやった方法。専用の封じ込めシールドを付与した腕輪と、アイテムボックスに

よる目視の空気抜き。これがあればアントニオでも、同じことができる。
あと2つは保険として用意した。手段を選んではいられない。
試合が始まった。迷わずシールドを張って空気を抜きにかかるが、剣でシールドを切り裂かれてしまう。おふう。そんなことができるヤツがいたとは！
「そう何度も同じ手は食わんよ」
シールドを切れる特殊な魔法剣か。対策してやがったか。残念、そんな気はしてたんだよな。ちっ、シールドは俺が張るべきだったか。
（やれ、第2弾だ）
アントニオはアイテムボックスから、俺が与えておいた〝あるもの〟を射出した。
べっとり。まさにそう表現するほかはない。それがヤツに向かって大量に降り注いだ。
「うお！　何だこれは～」
いきなりグレーの熱い粘る物体に包まれて、さすがのヤツも慌てている。
あはははは。鎧君、それは【ホットメルト】というものだよ。自動車のヘッドランプに使われている接着剤さ。ちょっと熱いけど我慢しな。その無敵の鎧がなかったら、蒸し焼きになっちまうところだ。
柔らかくするのに、80度以上の温度が必要なんだ。高温の砂漠なんかで融けたりすると、へ

ッドランプのレンズが外れたりして大変だからな。どろどろになった状態は、そんな温度じゃ済まないが。メルト機のタンクで加熱して、メルトの塊を溶かすヒーターには数百度の温度設定目盛りがついている。普通なら大火傷では治まらない温度と、圧倒的なメルトの量だ。本来なら、食らった人間は確実に死んでいるよ。

まあ、そいつはこの世界にはないものだから、知っていたら逆に驚くぜ。特殊な産業だけで使う物だから、日本人でもパッとは正体を見抜けまい。

首から下が見事に熱いどろどろの接着剤に埋まった。アントニオがブリザードを軽く唱え、直径３ｍ、重量５ｔもの巨大なホットメルトの山は冷えて緩やかに固まった。こいつは常温などで固まり、その後は粘性があるから余計に始末が悪い。力を入れても粘るだけで、砕けないからな。鎧ごと封じ込められたら、すぐには出られないぞ。

俺は調べたのだ。こいつは、そんなに魔法が得意じゃないんだ。外から溶かすのは無理だろう。アイテムボックスも保有していない。あとは……魔法の言葉を囁くだけさ。アントニオがヤツの耳元で愛の言葉のように囁いた。鎧男は驚愕して、すぐに自ら負けを宣言した。

なに、たいしたことは言ってない。ギブアップしないと、ディスカースの魔法で鎧の呪いを引き剥がすと。ヤツには鎧の力が必要なのだ。調べたら、自分からあれを着込んだようだ。理由までは分からなかったが。

アントニオはメルトを収納し、鎧男は自由になった。そして、こっちを恨めしそうに見ている。
「おい、そんな顔をするなって。勝負なんだからよ。今度うちに遊びに来いよ。酒でも奢ってやろう」
「くそっ。約束だぞ。これでお前にやられたのは2回目だな」
そう約束を交わして、俺たちは別れた。
ここでアントニオは1回休みだ。あと2回で、お家再興がなるんだ。気負わずにいけよ。
ちょっと人心地ついて、ホッとしてるところだろう。どーせ残りも暗殺者に決まってる。

次の相手は普通っぽく見えた。なんか蟷螂を彷彿とさせる。痩せぎすで全く強そうには見えない。だが油断してはいけない。分かる。こいつも暗殺者だ。
（こいつも黒だな。気を付けろよ。まともなわけがねえ）
（分かっている。用心していくさ）
アントニオが動く。だが動いた先に攻撃が着弾した。不可視で何の攻撃かよく分からなかった。先読み系の力があるのか。そして、アントニオが膝をつく。
（ど、どうした⁉）

慌てて念話を入れる。
（分からん。急に全身の力が抜けた。何か分かるか？）
（いや、だが普通じゃない。あまりまともにやりあうな。気が進まないがＭＩＲＶでいくか？だが、今日は１回見せているから躱されるかも。まあ今回はアレもあるしな）
アントニオはＭＩＲＶを全弾いった。こいつ、本当に躊躇いないよな。
そして炎幕が消えた時、ヤツはピンピンしていた。予想はしていたが、なんてヤツだ！
だが、レーダーＭＡＰをよく見ると、点滅し警戒アラームが鳴っていた。何だ？
映ったのは、明確な赤点が50ほど。ああ、分かった。こいつらが支援していたのか。戦ってるこいつはルーターだ。こいつを中継して、他のヤツらが力を合わせて攻撃していたのだ。51対１の戦いだ。アントニオが膝をついたのは、何かのスキル攻撃だったんだろう。
今もアントニオの攻撃がことごとく空を切っている。あれだけの数で支援すると、魔道鎧と渡り合えるのかよ。ヤバイ手だな。対策をまた練っておかないと。あれだけの数の上級魔法もブロックされたし。
だが生憎だったな。51対２だったんだから。ここは躊躇わずにいく。
俺は隠密系スキルを全開にした。もちろんディスサーチも。そして、赤点を一つ一つ丁寧に消していった。倒した相手はアイテムボックスに収納していく。全員下卑た笑いで、にやにや

していやがったが、それがヤツらの人生最後の笑いとなった。
対戦相手の男は驚いたように目を見開いた。いきなり支援が全くなくなったからだ。
（アントニオ、ヤツは50人の支援を受けていた。全部始末したから大丈夫だ。アレを出せ。思い知らせてやれ）
アントニオはそれを出した。その数、実に1万機。そう攻撃ポッドだ。支援を失ったヤツに、勝機はない。アントニオは全力でいった。なんの躊躇いもないな。実に惚れ惚れするぜ。相手は抗う間もなく粉々になった。
これでお咎めは一切なしだ。そりゃあそうさ。暗殺者のいる舞台の上から、引き摺り下ろすわけにはいかないしな。

続けて決勝戦が始まった。次は何だ？
もはや楽しみですらあるなー
次は鎧の大男だ。大剣を持っている。何か不気味な感じがする。背中の毛が全て総毛立つような、嫌な感じだ。しかも、鑑定が効かない。これは……人間じゃない？
竜男でさえ鑑定できたのに、ああいうのとは別なのか？　生物じゃない？
体の奥底から吹き上がってくる、強い衝動。『危険』『危険』『危険』……頭の中をメッセー

ジがマシンガンのように連射されて駆け巡る。
（アントニオーー！　そいつを今すぐ始末しろっ！　そいつはたぶん人間じゃない。いや生き物ですらない。もしかすると……）
アントニオが飛び退いた。なんと、魔道鎧が切り裂かれていた。これは異常な事態だ。そして、その部分は修復しない。
（アル！　何だこれは！）
（たぶん呪いのようなもの。呪いの魔剣だ。だが問題は本体のほうだ。あれはヤバい）
（どうしたらいい！）
（実はお前の腕輪に、残りのゴッド級の魔法を仕込んでおいた）
（またか！）
（とりあえず、剣から潰そう。ゴッドディスカースを使え。魔力はサポートしてやる）
アントニオはゴッドディスカースを使用した。とてつもないＭＰを食っていった。２００京ＭＰのベスマギルバッテリーの半分以上を食った。どんだけ呪われているんだよ！　俺が即座に魔力を補充しているので満タンのままだが。さらに８００京ＭＰ分のバッテリーを放り込んだ。
とうとう魔剣は崩れ去った。だが危機が去ったわけではない。激しい衝動はまだ消えない。

おっさんのリメイク冒険日記2
～オートキャンプから始まる異世界満喫ライフ～
試し読みはここまで
続きは書籍版でお楽しみください
書籍情報はこちら
http://books.tugikuru.jp/detail_ossan.html
緋色優希
イラスト 市丸きすけ
ツギクルブックス